

記入日 2022年8月8日
 助成団体名 一般社団法人環不知火プランニング 内
 「水俣から学ぶティーチャーズネットワーク」
 代表 森山 亜矢子 印

2021年度「水俣・熊本みらい基金」助成事業報告書



企画テーマ	水俣病学習の基礎づくりをした教員へのヒアリングとその想いや当時の教育現場を知るための教員研修
取り組み実施期間または日時	2021年10月から2022年7月まで

【目的】

水俣病で激震期の水俣芦北地域の学校では、親が原因企業勤務でありつつ被害者であり・・・。それぞれ複雑な生活環境にあり、子供たちにとって精神的にも経済的にも厳しい生活と暮らしがありました。行政や大人たちが手をこまねいている中で、手探りで子供たちに水俣の真実を伝える教員たちが存在しました。先生たちの活動により、子どもたちは、自分達は加害者ではないという重要な立ち位置に立てたのです。しかし、近年は当時活動していた教員が定年退職を迎え、高齢化が進んでいるため、水俣病の教育遺産存続の危機を迎えています。

その足跡を学ぶことは、とても有効であると考え、ベテラン先生たちへのヒアリングを行い、それらに基づき、オンライン研修を行いました。

今年度もコロナ禍中で対面式の密集する研修を実施することは難しい状況下ではありましたが、オンライン環境が学校現場でも家庭内でも整備され、個々人のスキルも向上したため、水俣地域内だけではなく、全国から参加をしていただくことができました。

今回の事業で「水俣から学ぶティーチャーズネットワーク」の活動を知ってもらいつつ、県外の若い教師たちもスタッフになっていただきながら、努力と工夫で熱量のある授業を継承する機運を共有化することができました。

【内容】

- ① 水俣病激震期の水俣での教育現場のお話を具体的にお聞きできました。「水俣からの学び」を「それぞれの地域で役立つ」ため、水俣芦北地域で実際に水俣病授業の基礎づくりをされた先生のヒアリング内容をデータ化して、他地域の先生にも共有化するための第一歩を踏み出すことができました。広瀬武先生と梅田卓治先生のお二人に記録に残したいことをお伝えして、お話をさせていただきました。
- ② 『現地水俣での水俣病学習』というテーマで多地域の方と一緒に聞き取る機会を設けました。梅田卓治先生のお話を聞き、質疑応答時間も設けました。コロナ感染の危険があり、対面で集まることができないため、オンライン講座を実施。参加者は基本的に学校の教員で、水俣病の授業を行っている教員やこれから取り組もうとしている教員を対象としました。オンラインのため関東、関西、九州など多方面からの参加がありました。
- ③ 上記、廣瀬先生と梅田先生とのヒアリングを文字起こしして、共有化する仕組みを作りました。文字起こしデータをサンプル化して環不知火プランニングのホームページにデータアップしました。同時に申請書もデータアップして、申請していただければヒ

アリングデータを送信する仕組みを作りました。

- ④ 長崎でヒアリングを実施しました。水俣と同じく被爆地長崎にも被爆者の記録があります。その保存と活用について、若き研究者山口響さんにお話を聞きました。また、平和学習の道を切り開いた自らが被爆者である末永浩先生にお話を聞きました。「水俣からの学び」と比較する基礎データとすることができました。

【成 果 物】

- ・ 広瀬武先生のヒアリングデータ ①
- ・ 梅田卓治先生の講演会データ ②
- ・ 当社団法人ホームページにサンプル PDF を掲載
広瀬先生と梅田先生 2種 ③ と ④
- ・ 当社団法人ホームページに申請書 PDF を掲載
広瀬先生と梅田先生 2種 ⑤ ⑥ ⑦
- ・ 申請校に上記データの配信(今後の活動)
- ・ 山口響さんのヒアリングデータ ⑧
- ・ 末永浩先生のヒアリングデータ ⑨

成果物一式

2021年11月12日(金)

水俣病 勉強会
会 育 育 育

広瀬 武先生 教育講演会

(金) 日 11 月 12 日

主催 水俣病 勉強会 協賛 熊本市教育委員会

講演者 広瀬 武先生 (水俣病被害者、水俣病被害者の子供、水俣病被害者の孫、水俣病被害者の曾孫)

ご自分の歴史を語ることを通じて、水俣芦北地域で当初タブーとされていた水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

勉強会主催 熊本県職員組合 水俣芦北支部教文部
場 所 水俣市もやい館 和室 A 室
記 録 森山亜矢子 (水俣から学ぶティーチャーズネットワーク)
協 力 梅田卓治 (水俣芦北公害研究サークル会長)

広瀬 武 先生 教育講演会



2021年11月12日(金)

講師:広瀬武先生

進行:梅田卓治さん

内容:ご自分の歴史を語ることを通じて、水俣芦北地域で当初タブーとされていた水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

・梅田
資料に沿ってお話をお聞きできたらと思っています。僕がいっぱいしゃべると時間が短くなります。先生、早速、資料に沿ってよろしく願います。

・広瀬

こんばんは。ちょっと腰が悪いものですから、椅子に座って失礼します。10月15日で87歳になりました。私は水俣市平町で1934年、昭和9年10月15日生まれました。

浜口尚子先生のお父さんは確か、相年だったと思います。県同教の会長を長く務めた宮崎新二郎さん、彼は熊大のときの同級生で、亡くなって1年4ヶ月になります。宮崎さんの奥様から電話がありまして、今度、宮崎さんを偲ぶ会の資料を作ると言うことで発起人が何人かおられて、ぜひ私にも原稿をお願いしたいということで、引き受けました。

あとで宮崎さんのことはまた、話の中に出したいと思います。

私が、当時の国民学校1年生(現在の小学1年生)の時に太平洋戦争が始まりました。12月8日、霜がいっぱいおり、靴下を履いていない靴を履き、震えながら、校長先生の話をお聞きしました。その時に「日本はアメリカを相手に戦争をすることになりました。みなさんも早く大きくなって、お国のために頑張ってください。」と言われた。その時はまあ小学1年生ですから、何も考えず聞いていたわけです。いま考えますと、校長さんの話はおかしいわけです。「早く大きくなって、お国のために尽くしてください。」と言うが、早く大きくなれる

るわけがありませんね。

3年生になると、現在の第一小学校に通うようになりました。それまで1年生と2年生は現在の第二小学校。第一小学校が本校で第二小学校が分校のような形でした。

1年生2年生のときは、姓が田中でした。3年生の時から広瀬になったのです。

これは大阪に母の弟がおりまして、大田といいます、その叔父の後見を受けて広瀬家に養子に入った。広瀬春子っていうのが養母でしたが、亡くなったものですから、私は家名を継ぐために広瀬に養子縁組したので3年生から広瀬に変わりました。

3年生の時に、退避訓練が始まりました。この当時はまだ防空壕が出来ていませんでしたので、一小(水俣市立水俣第一小学校)の裏の山に登って、そこに避難をしていた。退避訓練が昭和18年から始まりました。水俣の空襲は昭和20年が一番ひどかった。

チッソの工場があったので、空襲の目標になったわけです。昭和20年は空襲の連続で、学校に行ってもすぐ退避していました。それで各地区に分かれて分散教育をやっていましたね。私は平(ひら)にいましたので、西念寺で分散教育を受けました。

そのときに御堂で、いま目の前にあるような長机があって、勉強していました。ある日、自習の時に誰かが、すかしっぺ(おなら)をしたのです。それが臭いのなんのって。考えてみますとね、からいも(さつまいも)を食っているから、くさい屁を出した。「くさい、くさい」と言って騒いだわけです。そしたら、山下と言う男の先生が、理由も聞かずにね、男の子どもをみんな並べて、ピンタを張ったわけですよ。

私はいたずら好きな子どもでした。そのとき、「あんただろ?」と言った。そしたらむきになって、「いや、俺じゃない」と。揉めている間に先生から、「出ておいで」と言われて、私はその山下先生の前に呼ばれ、お寺の半鐘。桜の木で作ってある半鐘叩きで、頭をポカポカ殴られました。

5年生の時は、援農作業と言って、現在の水俣高校の南福寺にあるグラウンドですね。あそこはずっと田んぼだったのですよ。そこに、麦刈りのお手伝いにやらされて、みんな並ばせられて、先生の話をしている時に飛行機が飛びました。私が、「あー、飛ぶよ、飛ぶよ」と言いました。今度は、「話を聞かんやつは誰だ!」と先生が言うので、「僕です」と手をあげたら、今度は、麦刈の鎌の柄で、頭を殴られた。その時、いくつ殴られるのか数えました。涙を流しながら。48回殴られました。頭が凸凹になりましたね。「こういう先生には、絶対なりたくない!」と思いました。

新制中学になりました。教育制度が新しく変わったのです。小学校が6年生まで、中学校

が3年生までということではいわゆる63制度が始まる。私は水俣新制中学第1回生。校舎は第一小学校に借りて、1年生の時は、そこで授業を受けた。そしたらなんと皮肉なことに私が一番嫌いな先生が担任になったのです。その先生はのちにうちの教育委員会の指導主事になって、最後校長で終わりました。人生は、そういうことがあります。

その前に戦争は、8月15日に終わっています。連合軍の命令で文部省を通して炭塗り教科書になりました。軍国主義を高揚するような文章表現を全部墨で塗ってつぶしてしまいました。教科書のほとんどが墨塗りになったわけです。読む部分が少ないぐらいに墨塗り教科書でした。そして昭和21年、新制中学になって、文部省が「新しい憲法の話」というのを出しました。考えてみますとその頃の文部省の姿勢というのは、連合軍の指示に従った通達を出していた。中学の2年のとき、1年に入ったとき新制水俣中学校ということで、現在のように一中(水俣市立第一中学校)とか二中(水俣市立第二中学校)は、なかった。市内は全部水俣中学にまとめて、一小(水俣市立第一中学校)の校舎を借りて授業があった。一小の校舎は、戦時中、陸軍兵舎になっておりました。そこに爆弾がおちて、校舎が壊れたこともあります。私の記憶では、爆弾が2発落ちたと思います。

中学2年の時に朝鮮戦争が始まります。それに備えて警察予備隊が作られた。75,000人の警察予備隊。これが現在の自衛隊の前身です。中学2年のときです。水俣は、1949年、昭和24年に水俣町から水俣市になった。その時の人口が42,000人。そして、昭和天皇がチツソを視察に来たのですね。チツソというのは、国から大事にされていたわけです。チツソの復興が早いのは、国が力を入れて財政投資をして、工場が再開されたから。朝鮮に工場を持っておりましたから、朝鮮の興南工場からみんな引き上げてきた。だから水俣の人口は急に膨れ上がり、42,000人になって水俣市となったわけです。この頃、現在の中国共産党の中華人民共和国が誕生した。その最初が毛沢東。鄧小平に代わり現在は、習近平ということになります。朝鮮戦争が始まって、警察予備隊ができて、そして憲法は平和憲法と言われるけれども、自衛隊は現在でもずっと続いているわけです。ですが、日本の自衛隊は憲法のもとで、外国と1回も戦争したことがない。戦後一人も戦争で亡くなっている人はいないのです。これは平和憲法があるからです。戦争というのは、国家的な犯罪行為です。戦争は人を殺すためにあります。1人も戦後、戦争で死ななかったというのは、平和憲法の存在があるからですね。

昭和26年、1951年日教組は、「教え子を再び戦場に送るな」というスローガンを作りました。このころ、恋路島にはキャンプ場ができました。昭和26年にキャンプ場ができて、

昭和34年まで8年間、キャンプ場が営われていたわけです。

1953年、昭和28年に私は熊本大学に入学しました。私は経済的に家庭的に恵まれなかったものですから、熊大の2年コースに入りました。2年課程と呼んでいました。その時、熊本大水害が起きました。このとき非常に被害が大きな被害が出たのです。

1954年、昭和29年に自衛隊が発足した。ちなみに、この時、熊本県の労働金庫が作られました。私は2年課程でしたから、2年生の後期では教育実習を受けるようになった。私の教育実習先は現在の第一小学校でした。その教育実習に行った時に、担当指導教員が教諭の鶴山先生でした。その時から鶴山先生とのお付き合いがずっと続いています。教育実習の受け入れ打ち合わせの時に校長室に集められ、私たち教育実習生が2人で、もう1人は、山下恵美子さんがいらっしゃった。その打ち合わせに組合代表も来ていました。当時はまだ校長も教頭も組合にいましたから、第一小学校の職員数から言えば、全員組合員だった。その中で私が一番若い組合だったわけです。そして教育実習先の学校に採用されました。この時代は、地方教育委員会の力がまだありました。日奈久から来ていた平田校長が、「広瀬君、君はうちの学校に来るつもりはないか？」と言われた。「行けるのですか!？」と言ったら「希望しなさい。採るから。」それが実現して、教育実習した学校に4月から採用されました。そこから私の教員生活が始まったわけです。最初は小学2年生を受け持ちました。今でも覚えております。2年7組50何名の子供がいました。隣の学級の女の先生がお産をしたものですから、その学級を全部解体して残りの学級に振り分けてしまう。当時は産休制度がなかったのです。ですから60何名の子どもを受け持った。いま考えたらぞっとします。若かったので、疑問も感じないでやっていたわけです。その子たちは、現在70歳ぐらいだと思います。

1956年、教員になって2年目、私は私の意に反して代議員をさせられた。2年目ですよ。何十人という組合の中で一番私が若かったので、「勉強になるからやってみなさい！」などと言われ、職場の代議員をさせられた。そこから組合との付き合いが始まりました。考えてみたら、水俣病の公式発見が1956年、昭和31年です。この時に私たち第一小学校では、水俣病のことが話題になることはありませんでした。なんでかわからんですけども、みんな水俣病のことを一口も語ることはなかったですね。当時はまだチツソの勢いが強かった。ですから、チツソの陣内社宅の奥様達がPTA役員だった。ですから、なんとなくその水俣病のことを学校内で話すという雰囲気はなかった。鶴山先生もおられたけど、一度も話題になったことはありませんでした。また私の妻の母の日吉フミ子も同じ第

一小学校でしたが、やっぱり水俣病の話をする事はなかった。当時はそういう状態でした。

1957年、昭和32年から勤評反対闘争が始まる。現在の勤務評定ですね。愛媛県では、これがひどかった。昇給昇格を勤評に決めて、愛媛県の組合はバラバラにさせられた。組合運動するものは僻地に飛ばされたりした。そういうことがありました。日教組は勤評反対闘争の指令をして、県教組は緑のリボンを組合員全員着けるようにした。緑のリボンをつけているのは組合員で、勤評に反対しているという意思表示でした。

1959年、昭和34年に水俣の教育会館が出来上がりました。水俣の教育会館は組合員が全員簡易保険に加入して、簡易保険を団体で取り扱うので、手数料が組合に入ってくる。それであの教育会館の建設が完成したわけです。この時代は、天皇が結婚して、いわゆる美智子さんブームがありました。私もこの年に結婚しました。簡易保険は、毎月550円引かれていました。結婚したてで、非常に経済的に苦しくて、「簡易保険を払うのは負担が大きかった」と、私の家内が言っています。そういう中で教育会館ができたのです。

1960年、昭和35年に三池争議がありますね。みなさん三池争議でご存知でしょうか？この時に、私の家庭では長男が生まれました。長男は生きていたら現在、60歳を超えたと思います。

昭和36年、学力テスト反対闘争が始まったのです。熊本と荒尾に組合員の処分が出た。免職者も出ました。免職が7名、停職が4名。次の年の昭和37年に私は水俣支部の青年部長になりました。当時は水俣支部だった。あとで芦北支部と合併しますが。

次に新日窒の安賃闘争が始まりました。これは1年続きました。組合では青年部長で、組合的な発言をしていたものですからPTAの方から睨まれて、校長に圧力がかかったそうです。「広瀬は組合の強いほうだから、あれはどっかに移せ。」と、人事介入まで起こりました。そのときのPTA会長は徳富齒科といって郵便局のそばにあり、ご本人は亡くなられて空き家になっています。徳富齒科はゴリゴリの自民党で、「広瀬は組合の方で頑張りすぎるから、あれは飛ばせ。」ということで圧力がかかったそうです。後で校長がそっと私に教えてくれました。

昭和38年、私は葛渡小学校に転出します。一小には、8年お世話になりました。このとき私の母の日吉フミ子は教組から押され、市議員になった訳です。辞めるまで4期務めました。2年前103歳8ヶ月であの世に旅立ちました。

昭和41年に10.21と言いましてね、「人事院勧告を完全に実施せよ」ということで、全国統一行動がありました。ストライキをしたのですね。私は葛渡小学校に入った年です。葛渡小学校は臨時休校になりました。どうしてでしょうか？ストライキで葛渡小学校だけ臨時休校になった。1年から6年まで学年ごと1クラスで6学級だった。担任が全員組合員だったからです。だから葛渡小は臨時休校になって、NHKニュースにも登場します。葛渡の自民党の人たちが当時の谷村校長に抗議に来たそうです。しかし、校長は、私や私たちを支えてくれました。谷村さんは、組合を作った人間でした。そういう校長もいたことはいたのです。10.21のストライキに参加した人は、みんな処分を受けました。この時の水俣芦北支部長が、石牟礼弘さんと、書記長が森下臣男さん。人事委員会に、処分不当の申し立てをして、人事委員会の審議に参加しました。マンモス審理が熊本市の体育館であった時に、私を高校3年のときに担任した飯銅(はんどう)先生が、私と同じ処分を受けているというのが分かりました。非常に嬉しかったです。と言うのも飯銅先生が勧めてくれたので、私は熊大に入ることができたのです。

水俣病との関わりは昭和43年、水俣病対策市民会議ができて、その時からです。この市民会議は36名でスタートしますが、その中に教組から6名、石牟礼さん、鶴山さん、猶木(なおき)さん、生さん、梅田さん、わたしが、市民会議に参加したのです。この時から水俣病との付き合いというか、関わりが始まったのです。

その年、新潟で全国教研があり、私は人権と民族の分科会に水俣病の問題をレポートに書いて全国教研に参加しました。全体会場の前で、生さんと2人で水俣病のビラをまいたことを覚えております。生さんとは、葛渡小学校時代からお世話になって私にとっては命の恩人のような存在です。

昭和43年、水俣支部と芦北支部が一緒になって水俣芦北支部となりました。この時支部長が石牟礼さん、副支部長が松崎先生のお父様の松崎義彦さん、そして書記長が森下臣男さんでした。昭和44年に熊本で日教組の全国教研がありました。この時に、田中裕一先生が水俣病の授業実践の報告をして、非常に感動し、感銘を受けました。田中先生が全国教研で水俣病の授業実践を報告したのがもとになって、熊本で宮崎新二郎さんと岡崎和三さんが水俣病の授業を商学部で行った。宮崎さんは、水俣病の授業に取り組んで、あとに県教組の副委員長になりました。そして、その次は、県同教の会長、全同教の副会長を頑張られて、1年4か月前に亡くなっております。私にとっては、貴重な仲間でした。

昭和44年まで、私たち男の教師は宿直と言って、夜学校に泊まっていました。女の先生は、普通の日とは別にして、土曜、日曜に日直当番をせんといかん。今考えてみたら本当におかしなことなのです。何のために宿直があって日直があったかという、戦争中、天皇の御真影(天皇の写真)を守るため戦争中に始まり、それがずっと昭和44年まで続いていたのです。私たちは、馬鹿だった。そういうのに疑問を感じなかった。第一小学校の宿直なんか、1人で泊まるのですよ。第一小学校の裏で首つり自殺があったのに。さすがに第一小学校では宿直する男の先生の中から文句が出て、2人制になった。その時、私は葛渡小学校に行っておりました。熊本県で一番初めに宿直日直を拒否して、宿日直の廃止に取り込んだのは水俣芦北支部が、県下では最初です。今考えてみたら、本当に何のため泊まっていたのかなと。戦争中の名残をそのまま続けていたわけです。

研修権闘争は、昭和44年の宿日直廃止ができたその年に、指宿で日教組の九プロの教育課程研究集会というのがあり、水俣芦北支部から6名参加をしました。そのうち谷口哲郎さんと私について、校長が「研修の不承認」を出しました。不承認だったので、賃金カットを受けました。組合から救援がありました。

熊本県の同和教育研究協議会が発足したのが昭和45年です。この頃、チッソの組合は補償処理委員会に抗議して、8時間のストライキをしています。補償処理委員会というのは、厚生省の出す案に「お任せします。一任します。」というもの。これで水俣病の患者団体が、補償処理をめぐる分裂した。それに反対した人たちが裁判をしたということです。昭和46年、私は5年生を担当してその時に水俣病の授業をした。裁判をしている浜元二徳さんに来てもらって授業したのですが、これがまた問題になりました。校長会でも問題になり、市の議会でも問題になり。校長会では、幸い「あんな授業もあっていいんじゃないか」とうちの学校の谷村校長と、当時三中の校長だった溝部校長が授業を見て、「あんな授業もあって良い」と校長会ではなりました。しかし、市の議会では、「広瀬の授業は、偏向だ。」「裁判中の患者を呼んでやるのは生々しい。行き過ぎた日教組の教宣活動だ」と言った議員がおりました。その議員は、子供時代からずっと一緒に遊ぶ仲の議員だった。もう亡くなりましたけど。それほど授業をするのはタブーだったのですね。タブーなのでみんなが、なかなか取り組めなかった。しかし、市民会議に入っている仲間の中で私が最初に授業して、その後、梅田さんが授業するというようなことも出てきた。

1972年、昭和47年、袋小学校に転出をして3年生を受け持って研究授業をしました。「大きな工場ができて」というテーマで授業をしました。この時、県教組で赤い本、赤本

を作りました。「公害と教育」という赤本です。私はその編集会議が夕方からあるので、当時は特急列車を使ってその編集会議に出て、夜遅くまた帰ってきていました。松本博司さんと2人で編集委員として関わりました。そうやって「公害と教育」の赤い本ができました。翌年、昭和48年に水俣病裁判の判決が出ました。これを契機に水俣病がタブーでなくなっていくのです。先生がたも授業に取り組むようになりました。県教組は、水俣病に関する授業に関して一斉授業を指示しました。水俣セミナーを芦北支部では、小中学校43校ある中で、41校が授業しました。

昭和49年に、現在の「退教協」が生まれました。「熊本県退職教員等協議会」が、正式名称です。略して、「退教協」と呼んでいます。

昭和51年、水俣芦北公害研究サークルができます。会長が鶴山先生でした。この頃、主任制反対闘争も始まりました。田中さんはまだ組合員じゃなかったのですが、組合はみんな赤ワッペンをつけて学校に行っていました。卒業写真を見ると、これを付けているのが組合員というのがすぐ分かる。この後、田中さんが組合に入ります。次の卒業写真には、田中さんもつけて写っているわけです。沖縄での全国教研に、田中さんはレポーターとして参加をした。この頃から田中さんの水俣病との関わりが始まっております。昭和55年、袋小から水俣二小に異動しました。この時に、私は日本社会党の党员として入党しました。現在、社会党はなくなりましたが、社民党の党员として籍を残しており、社民党の水俣総支部の代表は田中さんです。

昭和60年、私は石坂川小学校に転出します。私は娘が大学の卒業ということで東京に行っている途中、校長から娘に「お父様栄転されましたよ」と電話があった。しかし、行き先は栄転ではなく、第3希望の学校でした。そして、初めて複式学級を担当しました。複式の経験がなかったので3年間四苦八苦しました。石坂川小学校を3年で出た理由の一つは、亡くなられた支部長で私と1級違う松本親(ちかし)さんが、「副支部長になってくれ」としきりに要請されたので、「石坂川におったらそういうのはできませんよ」と返事をした。「いや、できるようにするから、人事希望を深川小学校にしてくれ。」と言われ、深川小学校に希望を出した。当時は、まだ組合の力があつたので、希望通り深川小学校に移ることができたのです。副支部長として5年間努めました。「最後の1年間はじっくり学級に腰を据えたい」ということでお断りをしました。副支部長時代に松崎さんが組合に加入してくれたのは、忘れもしません。本渡(天草)で教研集会があつた時に、組合に松崎さんが入るということを意思表示してくれたので、嬉しくて、嬉しくて、ぐてんぐてん

になるまで飲みました。嬉しい懐かしい思い出です。私が石坂川小学校にいるとき、鶴山先生が亡くられました。サークルの会長を私が引き継ぎ、私が辞めたら田中睦(あつし)さん、現在が梅田さんということになっています。

平成3年、1991年、全同教大会が熊本であり、この時に県同教の宮崎新二郎さんから強く要請を受けて、特別部会で報告をしました。市の体育館に3000人ぐらいいたと思いますが、浜元二徳さんと2人で報告しました。今でも強く思い出として残っております。深川小を60歳5ヶ月で退職をしますが、この日は私にとって40年。教師の年数と組合員の年数は一緒です。40年の組合員経験の中で、非常に嬉しいのは、組合員の結婚の仲人を務めたことです。名前を言います。最初が学校事務職員の宮野さん。2回目が田中睦さん、3回目が津江さん、その後が高木さん。

そろそろ締めくくります。組合員としては大したことをやってないが、初心貫徹と言いましようか、初心を変えないということで、組合員として最後まで頑張れたのはやはり仲間がいたからです。こうやってここにいらっしゃるみなさんも組合員としての仲間の支え合いの中で頑張っておられると思います。非常に雑な話で申し訳ありませんが、これで終わります。ありがとうございました。

・梅田

さらに1時間ほど詳しくお聞きしたいところですが、限られた時間があります。今日は、大変な中、無理をお願いして広瀬先生にお話しいただきました。聞いてみたいということ、感想でも良いので時間ギリギリのところまで行きたいと思います。

・広瀬

1つ言い忘れました。第一小学校の裏に防空壕がありますね。秋葉山のところですよ。11はあると思います。昭和18年から掘り始めたのかな？朝鮮人の労働者も関わっているのですよ。幸いここに田中議員がおられますから、ぜひ行政に要請をしてほしいと。「ここは戦争遺跡の一つ」という、そういう表示をしてほしいということです。朝鮮人の労働者が「西松組」に使われ、私の子ども時代は「朝鮮、朝鮮」と言って馬鹿にされていた。日本人はやっぱり外国人を差別している。中国に対してもそうですし、朝鮮に対してもそうですよね。そして国内では部落差別とか公害、水俣差別とか。日本人の心の中にはやっぱり差別が残っている。それを取っ払っていくのは、やはり教育の力しかないですよ。

のは、小さい頃から知っていました。朝鮮人のお話がありました、僕の父親が北朝鮮興南工場から命からがら帰ってきたこと。また駅通りには帰化された朝鮮の方がいっぱいいたことを母から聞いていました。前川サッシさんがそうだとか、どこどこがなんだとか、水俣はそういう朝鮮と関係があり、太平洋戦争以前は、無理やり連れて来られた人もいっぱいいるようです。そう言うことももっと勉強しなければならないと思っているところです。

・津江(参加者)

1969年に田中裕一さんが実践されて、1971年に広瀬先生がされて。そして、1976年にサークルが出来て、1978年から1979年にかけて青本実践資料集を作られましたが、あれだけの内容の資料が短時間でよくできたなと思っています。サークルの結成が76年、そして青本ができたのが79年ということは、サークルができて3年間でできている。よっぽどいろんな方が実践をされていた。あるいは資料を作ってから授業をされたのか?その辺の経緯をお聞きしたいです。

・広瀬、梅田、田中(参加者)

協議会館のサークル役員会で、集中的に会合を持って夜遅くまで話し合いをし、お互いの資料を持ち寄って協議していきました。ある時は、湯の鶴温泉に泊りがけでやったこともある。お互いの実践を持ち寄り、各学校の実践も取り入れました。サークルを作った時の会員は確かに22名だったと思います。

中学校の社会科の先生たちもサークルの会員で、例えば光永さん、池田正邦さんやサークル以外でも井上博之さんの名前も青本の裏に書いてあります。それぞれの教科で実践されたものを組合に持ち寄って、合宿みたいな形で、みんなで検討しながら、一冊を作り上げていきました。3年の短い期間にそれぞれがこだわりを持って実践したものを結集したという感じです。

結局、73年に日教組が一斉授業を提起し、水俣芦北では、43校中41校の学校でみんなやったわけですね。指導案も作っていらっしやっただと思います。井上先生は、体育授業の資料がパッとでてきた。あとは、実践のすり合わせというか、視点などをみんなで協議しながら、これが青本にふさわしいものか?と、いろいろなものを検討してきたのでしょう。読み物資料は、患者さん達の声や日頃からずっと付き合ってきた信頼関係があったからこそ多様な良い資料ができあがったと思います。

・梅田

もっともっと詳しく聞きたいところです。先生にまた来ていただいて。できれば一緒にこうお酒でも飲みながら、そういうのが戻ればいいなと思います。お話をゆっくり聞かせてもらいたいなと思いがあります。

(香城冬) 正幸・

・松崎(参加者)

謝辞というか、私の言葉を言ってよいですか？ だいお前に計画して広瀬先生にはご迷惑かけたなというふうに思っております。今日は1時間でしたが、親父の名前も出てきて、水俣支部や芦北支部の歴史にも触れていただき、組合員も少なくなりましたが、今後しっかり頑張っていこうという気持ちになりました。本当にありがとうございました。広瀬先生の87年の人生をこちらの都合で話してもらいました。もっともっとお話いただきたいと思っておりますので、今後もよろしくお願ひします。今日は本当にお疲れ様でした。

(香城冬) 中田, 田中, 藤本・

勉強会主催 熊本県職員組合 水俣芦北支部教文部

場 所 水俣市もやい館 和室A室

記 録 森山亜矢子(水俣から學ぶティーチャーズネットワーク)

協 力 梅田卓治(水俣芦北公害研究サークル会長)

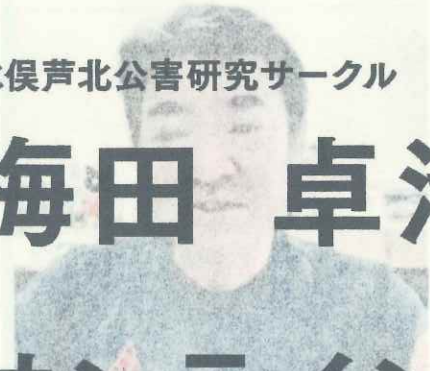
2022年6月25日(土)

水俣病公害被害者救済基金

水俣芦北公害研究サークル 4代目代表

梅田卓治先生

梅田卓治先生



オンライン研修会

(土) 2022年6月25日

【研修会内容】：マーサ

水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動。

現地水俣での水俣病学習について、地域内でどのような授業を
実践されていたのか話していただいた。

<前半前>

講師 梅田卓治先生

患者さん、生徒との交流を通じて、教師もともに育ててもらったという
今も含む貴重なお話し。

水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動、水俣病の被害者に対する支援活動。

- 主催 水俣から学ぶティチャーズネットワーク
- 共催 (社) 環不知火プランニング
- 助成 熊本みらい基金
- 協力 神戸市小学校教員(司会進行：竹中美香子、オンラインパイロット：増山光、武藤太平、オンライン受付：吉田かよ子)
- コーディネーター (社) 環不知火プランニング代表・森山亜矢子

水俣芦北公害研究サークル 4代目代表

梅田 卓治 先生



オンライン研修会

2022年6月25日(土)

テーマ：「現地水俣での水俣病学習」

内容： 現地水俣での水俣病学習について、地域内でどのような授業を实践されていたのか話していただいた。患者さん、生徒との交流を通じて、教師もともに育ててもらったという今も含む貴重なお話し。

<前半部>

梅田先生講話

こんにちは。紹介いただいた水俣芦北公害研究サークル4代目代表の梅田卓治と言います。僕は一旦学校を退職し、再任用で小さな山間部の小学校に勤めています。再任用5年目になり、特別支援の担任をしています。今日は、こういう機会を作っていただきましたので、一時間半有意義な時間になればと思っております。どうぞよろしくお願ひします。

自己紹介を簡単にしたいと思います。いつもついつい喋りすぎて、肝心なところで時間が足りなくなりますので、ここは簡単にお話しします。チッソ社員の長男として、1958年2月11日に水俣で生まれ育ちました。祖父は北朝鮮の興南工場に勤め、父は一緒に行っていたので、終戦とともに命からがら帰ってきた経歴を持ちます。祖父も父もチッソ社員でしたので、小さい頃から僕に入ってきた情報というのがチッソ側の情報ばかりでした。今日は、授業の实践を中心にお話してくれと言うことですので、「豚肉事件」「中体連事件」など、僕自身が小中学生のとき経験した話もしたかったですけれど、時間も限られているので、よければ水俣においでになった時、この話はじっくりできるかなと思います。よかったら水俣に長期休業など利用しておいでになってください。

「出身地事件」のことだけお話をしたいと思ひます。僕が大学をどこに行こうか迷っていた

時代は、一期校、二期校最後の年で、二段階受験ができました。そして、二期校をどうするか迷った時に母の弟が神奈川県にいたので当時二期校だった横浜国立に行くことになりました。北は北海道から南は九州から来ている仲間がいました。そこで最初は、「お前出身どこだ？」という話になるわけです。その時に僕自身は、自分の出身をストレートに「水俣」と言えませんでした。「九州だ」という言い方をするのは。少し付き合いが長く、深くなってくると「九州のどこだ？」ってなるわけです。それでも「熊本」と言って、「水俣」の名前を言えない。「あの火の国熊本の出身か」と言われる。見た目がこういう格好ですので、なるほど暑苦しい感じの熊本出身で納得してもらって終わる。だけど、もっと付き合いが深くなると「熊本のどこだ？」と言う話になるわけです。その時に、「実はあの水俣だ」と言うとほとんどの友達が、「あの水俣病の水俣か」と答えます。そして、必ずその後質問がついてくる。「お前は水俣出身なのになぜそんなピンピンしてる？」と。元気な見た目をしていたのでいつも質問されていました。その時に答えていたことがとても情けなかった。「俺が食べていた魚は、ずっと沖合でとってきた魚だ。水俣病の方たちは、沿岸で魚を獲って多食した人たちだから、まったく俺とは関係ない。自分が食べていた魚は、水俣病の患者さん達が食べていた魚とは違って、だから俺はこんなにびんびんしているんだ。」と言う、とんでもない説明をしていました。

そんな説明を聞いて、ほとんどの人はそれで終わる。「ああ、なるほど」と言うように納得していました。それをいいことにそう言った説明を繰り返していたのです。

関西から来ていた友達が、お酒の勢いもあったのかもしれませんが、急に怒り出したのです。「梅田、お前は今までストレートに水俣って言えなかったろうが、お前は心の中に自分の故郷「水俣」に水俣病っていう病気があってそれを恥ずかしいと思っているだろう。水俣病患者がいることを嫌だという思いがあるからだろう。」と突っ込んできました。返す言葉がありませんでした。

その通りだったからです。でもそのときにその声をかけてくれた友達のおかげで、いかに僕自身が故郷水俣と向き合えていない、水俣病問題としっかり向き合ってこなかったというのを思い知らされました。

まあそういう僕自身の、「水俣病と出会いができてなかった」ところが、今の僕自身の、この公害サークルに入ってもっと知らなくちゃいけないというきっかけになったと思います。

学校に赴任したら水俣病のことを話すことになりました。初任の菊池郡の西合志南小学校では、今、皆さんにお話ししたような出身水俣を語れなかったという話を子供たちに話す

ことは、一度もありませんでした。この小学校は、人権同和教育を真剣に取り組んでおりました。それでも話さなかった理由は、自分が人権同和教育と水俣病問題を重ねることができていなかったからだと思います。

そういった中で、3年後、水俣の学校に異動しました。そこで、公害サークルに入ります。今日は、サークルについてはあまり詳しく話できませんが、1975年に「患者差別弁論事件」と言うのが起こります。公害サークルの青本の中に「水俣病と言う名前に対して」というタイトルの資料が載っています。その中に「何で水俣病という名前がついたのだろう、おかげで自分たちはとんでもない差別を受け、迷惑をこうむる。せめて水俣病と言う名前でなかったら・・・」ということが書いてあります。それだけではなく、「患者さんと言うのは楽をしてお金が入るからうらやましい」ということも書いてあります。「そういった考えがいけないのではなく、そういった考えにしたのは教育の責任だ」と。

我々の先輩が、「こう考えるのは、氷山の一角で、大多数の水俣の人間はそういう風に思っているのではないか？それは教育が、そういう思いしか育てられなかった責任がある」ということで、先輩方が、1976年8月水俣芦北公害研究サークルを発足させました。

基本的姿勢は、ここに書いていますが、「当事者に学ぶ」のが基本姿勢です。

◎基本的視点:わたしたちは、**金銭であがなうことのできない人間の生存と差別の問題を深く内包する水俣病の実情を教えることで、疎外された人間関係の復権・価値判断の改革を自ら志向できる子どもたちを育てるための授業実践に取り組むものである**(サークル「青本」より)

◎基本的姿勢:**「被害者(当事者)に学ぶ」**

患者さんが、周りにたくさんおられるわけですから、地の利を生かして、当事者の声を聞きながら、何を子供たちにどう伝えていけばいいのかと言うのをしっかり探っていこうと発足しました。

一昨年、月1回の例会が、500回を超えました。月に1回しかやっていない例会が500回を超えたということは、46年経ったということです。先輩たちが患者さんやその支援をする方々と信頼関係を重ね、ずっと続いてきたのは僕たちの誇りです。水俣のおれんじ館で500回記念の集いをしました。

普通だったら決して一堂に会せないような人が同じ場所にいました。患者さんたちは、いろ

んな事情があり、お互いいがみ合っているわけじゃないけど、運動の仕方が違うということで被害を受けた人たちが一枚岩になれないという現実があります。でも、このサークルの記念の集いには、絶対一緒にいるわけがないと言われた方たちが来ていました。本当に僕たちは、先輩たちが信頼を得た結果このようなことができていると思っています。今でもいろんな団体の方たちとお付き合いをさせてもらい、活動しています。

これが第4版の改訂版青本です。ちょうど公式確認60年に第4回目の改訂をしました。2500円とちょっとで割高ですが、水俣市立水俣病資料館に連絡もらえると発送されます。ご希望の方は、貴重な資料もいっぱいありますので、ぜひ、購入してください。次にこれは、黄本と言って、いま司会進行をされている竹中さんの手元にもあるとおっしゃられていますが、サークルの仲間で、水俣高校の石井雅臣先生が水俣から日本を見るということで、現代社会の授業の中で、ワークシートをベースに僕らのいわゆる水俣病実践を進めるうえでの基本的なとらえ方、社会をどう見たらいいのかと言うバイブルになる本です。これはデータが火事で紛失して、絶版になっていますが、もう一回、作り直そうという動きがあります。コロナの関係で会議がしづらいこともありましたが、これから動き出す予定です。

サークルの活動は、いま話しているような、研究会や学習会で報告をすることがありますが、一番多いのは現地案内です。夏休みに向けて、すでに6件ほどのオファーが入っています。水俣フィールドワークと患者交流をセットにした現地学習会などです。県内や他県からもオファーが来ます。こういった案内をやりながら水俣病を通して、何を子供たちに伝えていけばいいのかと言うことを一緒に考えていく、そういった取り組みを進めているのが、公害サークルです。それでは、授業の中で、こだわっていることについて、お話ししたいと思います。

水俣病学習のこだわりは、5つあります。

3 水俣病学習でのこだわり

- ①「水俣病を学ぶ」のではなく「水俣病を通して学ぶ」(学びの切り口をさぐる)
- ②学びをくらしに生かす(重ねる)→実態から目指すものを明確にする
- ③現地に学ぶ(当事者に学ぶ) 生の声を聞く努力+自分の目・耳・鼻・心・手で感じたものから授業を組み立てていく

④人の実践に学ぶ(尋ねる・教わる・真似る・試す→自分のものにしていく)

⑤自分の実践を問う(子ども・保護者・患者・地域・教職員・〇〇に...)

一番のこだわりは、「水俣病を学ぶのではなく、水俣病を通して学ぶ」です。意味はお分かりだと思いますが、単なる知識を伝えていくのではなく、歴史的にこういうことがあって、被害者がこれで加害者がこんな人だとか、そういうただ知識を伝えるのではなく、何がどう問題だったのかと言うのもふくめて、水俣病を通して、切り口を変えながら、そこから学べるものを探していく。そのように学ぶことにこだわっています。熊本大学で研究されていた原田正純教授の晩年、熊本学園大学で「水俣学」を起こした方です。「水俣が映す世界」著書の中で、原田先生は、「水俣病の原因は大中小ある」ということを書いておられます。「小なる原因は、原因物質である有機水銀。中なる原因は、毒があっても流さなければ水俣病は発生していないわけで、中なる原因はその有機水銀を流したという行為。」でも、じゃあなんで流したの?と言うことになるわけです。「大なる原因は、自分さえよければと言う人間のエゴだ。」ということが書いてあります。結局は患者さんたちが犠牲になったのですが、「一部の人の命や暮らしを破壊しても、社会発展のために止むを得ない。自分たちが儲かるため目をつぶるという自分勝手な考え。それが水俣病を引き起こした原因である。」ということが書いてあります。

そういった一人一人が他人のことに目を向けない、そういうエゴは誰にでもある問題で、そういうことを「水俣病を通して学ぶ」ということにこだわっています。

2番の「暮らしに活かす」「現地に学ぶ」についてお話します。水俣の小中学校は、いま、コロナ禍で患者交流が凍結状態と言うか、対面できない状態ですが、以前は、各学校に、患者さんたちが出向いて、いろんな思いを語ることが、頻繁に行われました。子供たちは交流が終わった後、感想を書くわけです。その感想の中に、「水俣病の患者さんはとても前向きだった。だからわたしは、患者さんみたいに前向きに生きていこうと思います。」という感想を書いている子供が増えてくるようになりました。僕らサークルは、「前向きに生きていこうと思います。という感想で終わりにしていいのか?」と、よく話題にしました。前向きに生きようという考えをもつことは悪いことではないと思います。でも、「なぜ、患者さんが前向きなのか?」を考えないと、結局は表面的に「私も患者さんみたいに前向きに生きていきたい」というだけで終わるんですね。僕たちは、患者さんに聞く中で、「彼らがなぜ前向きに生きていけるのか?」について分析したことは、彼らは、しっかり学習を深めたからだと思う

のです。決して、「自分たちは、水俣病患者であることを負い目に感じたり、引け目に感じたりする必要はない。」という確信をもっているからなのです。そういう気づきは、授業の中で、しっかりとした学習があって成り立っていくわけです。

二つ目は、「きついときに、俺はいまとっても辛い。きつい。という弱音を吐ける仲間がいる。だから、そういった仲間の存在が自分たちを前向きにしてきた。」と、口をそろえて言われる。例えば、「私は前向きに生きたい。」と書いている子供に、「なんで(患者さんは)前向きに生きておられるのだろう?」という問いかけをもう一步、突っ込みます。先ほど言ったような二つの理由を深く考えていけるようにして、自分が前向きに生きていこうと思うのであれば、自分自身が弱音を吐ける仲間がこのクラスに「いる」自分を見つめなおす。弱音を吐ける大切な仲間を失わないために、これからも今まで通りの自分であり続ける。でももし、「いない」という答えが出る子供がいたとすれば、「なんでいないんだろう?」と考える。例えば、人を見下していたり、友達に意地悪をしていたり、強がっていたりしたとしたら、決して弱音を吐けませんね。だから、そうやって自分が相手を本当に大事にしていないから、自分は弱音を吐けないことに気付かせて、そうじゃない自分にならなっていくことが「学びを暮らしに活かす」ほんとの学びじゃないかなと思います。

交流して、「前向きに生きたい」と書くことの先にある、「前向きに生きるために私はこう変わっていききたい」とか、「こういうことに気を付けていきたい」ということを、考えさせていくことが学びじゃないかなということをこれまでサークルや研究会の中で、話題にあげてやってきました。

次は、「当事者に学ぶ」ということで、上村さんご家族について話します。上村智子さんはみなさんご存じで、ユージンスミスの写真集に出ていますね。上村智子さんのお父さんお母さんは、「水俣の赤い海」という本の中で、智子さんのことを「宝子」と呼ばれていたんですね。映画「MINAMATA」(主役ジョニー・デップ)を見られた方も多いと思います。この写真集の中に、入浴の写真で有名になったのが、上村智子さんです。この方のことを、お父さん、お母さんは宝子と言ってこられた。

これは青本にも載っていて、「水俣の赤い海」の中で、原田先生は、「宝子である三つの理由」を書いています。この家族写真で智子さんを中心に6人の弟や妹が、誕生日のお祝い集っている写真があります。智子さんは長女で、下に6人の弟や妹が生まれる。これは胎児性の悲劇と言われていることの一つです。「胎盤という、毒から胎児を守るフィルターは

毒物を通さない」という医学界の定説があった。しかし、有機水銀と言う化学物資を身体は毒と認識できず、むしろタンパク質などの栄養と認識したため、胎児にどんどん有機水銀を送り込んだ。その結果、お母さんの体に本来たまはずの有機水銀は、おなかの中にいた智子さんに送り込まれ、お母さんは智子さんを出産した後、体の中に残った水銀が少ないがために、後から6人の弟や妹たちを妊娠・出産できているわけです。

「水俣の赤い海」に書かれている一つ目の理由が、「智子さんが、一人で毒を吸い取ったおかげで、6人の弟や妹たちの命をこの世に送り出してくれた。お母さんの命も守ってくれた。だから宝子だ。」というのが一つ目です。

二つ目は、7人弟妹と親を入れて9人家族です。お父さんは、9人を養っていくため、ダブルヘッダーで仕事をした。朝から勤め始めて、夕方終わり、そのあと同僚のだれか具合が悪くなった人とか今日はきついから誰か代わってくれと言う人の代わりにどんどん仕事をしていった。家にはなかなか帰らず、必死に働いているお父さん。そして、智子さんが床ずれをしないように、一生懸命お母さんはつきっきりで介護されていた。姉や家族のためにお父さんとお母さんは必死になっている。それを見た弟妹は、家族のため必死になって働いているので、心配をかけまいと、自分たちでできることは全部自分たちでやろうと、自立がとても早かったそうです。下の子のおしめが取れるのもとても早かったとお母さんが言われていました。そういう「弟妹のきずなを太くしてくれたのも、智子さんのおかげだ」ということで2つめの理由だと言っておられました。

3つ目の理由は、さきほどのこのユージンスミスの写真集。このおかげで、世界中に水俣病と言う存在を発信してくれた。「体を張って公害水俣病の存在を知らせてくれた。」ということが、「水俣の赤い海」に書いてあります。

ぼくは、当時4年生を7人担任しているときに、三つの宝子と言われるわけを考えさせて一人一人の存在と言うか、一人一人の命は、家族にとって、宝であるということ。だからまず、自分を大切にしてお互いを大事にし合おうという授業実践をしようと思い計画を立てました。

たまたま、お父さんからサークルの先輩たちが信頼を得ていましたので、お酒大好きで、一緒に飲みませんかと言ったら、よく来ていただいていた。

授業をする一週間ほど前にカラオケに行く機会があり、ぼくの隣に上村お父さんが座られた。「上村さん、僕今度、授業するんですよ。あの「水俣の赤い海」に書いてある、宝子と言われる三つの理由を、子供たちに考えさせて、先ほど言ったように一人一人宝なんだという

確認をしたいのです。」と言う話をしました。おそらく「違う」とは言われないうらなと思
いながら、確認をするような感じで言いました。すると、なんとおっしゃったかと言うと、「う
ん、あの赤い海に書いてる三つの理由は、自分が原田先生に確かに話したから、間違いは
ない。だけど・・・我が娘だものもじょかったい。」と、本に書かれていない理由をおっしゃ
たんです。どういう意味かと言うと、「我が血を分けた子供だから、可愛くないはずがなか
ろう」と。もじょかというのは、かわいくてかわいくてしょうがないという意味なんです。それ
を聞いた時に、はっと思いました。この本には書いてないが、我が子供として生まれて、21
年間。言葉を発することができず生きてきた智子さん。あの映画を見た方はお分かり
でしょう。今生きておられたら6月が誕生日なので66歳です。45年前、21歳の若さで亡くな
られた。でも今でも上村お父さんは、智子さんのお話をされるときに、涙されるのです。心
の傷は決して癒えていない。

僕は7人の子供たちに授業するとき事前に「なぜ宝子と言われているんだろう？そのわけを
考えて書こう」という事前プリントを配って書かせました。すると、「毒を吸い取ってくれた」
という発生のメカニズムを言い当てている子供が3人ほどいた。そして、「水俣病の存在を
世界中に発信した」というのも書いている子がいた。ユージンスミスの写真集を取り組み
期間中、教室の後ろにいつでも見られるようおいています。

その中に、「水俣、ユージンスミス・アイリーンズミス」と書いてある。訳は、「中尾ハジメ」と
書いてある。これは、世界中に出回った本だということに気付いて、「世界に水俣のことを
知らせた」ということを書いている子供も二人ほどいた。よく気付いたねと言いながら、た
だ、2番目の「弟妹のきずなを太くした」ということを書いている子は残念ながらいなかった
ので、「実はこんなことも書いてあるよ」と僕のほうから教える形で言ったのですが、さきほ
どの4つ目の「我が娘だもの、もじょかったい」と本人がおっしゃったことに触れている子
供が、7人のうちなんと3人ほどいた。自分のおなかを痛めて産んだ子だからとか、自分の子
供だからとか書いていたんですね。授業を進めながら、みんなも一人一人宝のはずなんだ
とその宝をまず自分が大切にしているかい、そしてお互いに尊重してなくて、傷つけあっ
たり、友達を傷つけたり、痛いめにあわせたりするようなことをしていないかいと聞きまし
た。自分たちが日ごろから自分のことや仲間を大切にしているかを聞きました。その7人
の中に、一人、親が離婚して、お母さんは北九州の方に行っている子供がいたんですね。その
子がボソッと僕の顔を見ながら、「僕も宝かな？」と言ったので「じゃあ、宿題だ。今日家に
帰ったら、父ちゃんに聞いてごらん。僕、宝？ってきいてごらん」と言ったら周りの6人も僕の

方をじろじろ見ているものですから、「じゃあ、みんなも今日は宿題だ。みんなも今日は聞いてきてごらん」といったら、翌日、朝からみんなにやにやしているんですね。そして、「なんて言われた?」とお互い話しているのも聞こえてくるんですね。そして、「宝と言われたよ」とか言っているんです。そして、親が離婚した男の子に「なんと言われたかい」と聞くと、最初は「お父さんが何でそんなことを聞くとかい」と言ったんだけど、ぼそっと、「うん、宝たい」と言ってくれたと。「そうだろ?だからみんな自分の命を大事にしないとイケんよ。」言いました。

このペースで行ったらほんとに時間が足りなくなるので次のお話にうつります。

次は、坂本しのぶさんです。中学校の「きずな」と言う、熊本県人権教育研究協議会が作っている副読本なんですが、「こんにちは、胎児性水俣病のしのぶです」と言うタイトルの教材があります。これは、青本から提供しているものです。しのぶさんから、僕自身が学ぶこと、教えてもらうことがいっぱいあります。、中学校の先生方が、この副読本に載っているの、しのぶさんのことをいろいろ聞きたいというオファーがあります。それで、しのぶさんに同行して一緒に伝える、いわゆる患者交流のお手伝いをするという仕事をいっぱいさせてもらってます。先月は、八代市立第二中学から芦北青少年の家で、胎児性患者さんの生の声を聞きたいというお話があり、しのぶさんをつれて一緒にお話をしました。その中で僕自身が一番学んだことを話します。水俣市立袋小学校に勤めているとき、彼女は自宅から浮浪雲と言う、手漉き和紙工房に毎朝彼女は自宅から徒歩で通っていたんです。その通っていく道の途中に、陣原団地があって、袋小の子供たちは集団で学校に向かっていました。袋小の小学生は、しのぶさんと毎日すれ違っている中で、あるとき、中学年くらいの子供が、「しのぶさんの跳ねるような歩き方をまねしてからかった」ことがあったらしいんです。彼女が浮浪雲についた時に、一緒に活動をしていた金刺潤平さんはしのぶさんから、「今日の朝、自分の真似をする子どもがいた」と、報告を受けました。そして、これからどうしたらいいかと話し合いをしたらしく、その時、「そういえば梅田さんが袋小にいるな」ということで、職員室に電話をかけてこられました。「梅田先生、金刺潤平と言う方から電話がかかっていますよ」と言われて、電話をとったら、今言ったように、「しのぶが言うには、朝から真似をした子供がお宅の袋小にいるらしい」と言う話をされた。学校の先生ってすぐ、頭の中でわぁっとめぐるせて、「うちの学校の子供はとんでもないことをしてくれた、誰がそういうことをしたのか探し出せ」という感じになります。僕も犯人を捜しだして、厳しく

指導と言う名のもと、叱ってもらわにゃいかんと思ったんです。ところが電話で、潤平さんが続けて言ったのは、「先生たちが犯人探してみたいなのをして、誰がやったのか見つけ出して、二度とこういうことをするなよ。というのをやっても、問題は解決しない。しのぶさんのことを本当に知らないから、そうやってからかってまねをする。先生たちに叱ってもらより、しのぶさんのことを知る機会をつくってやってほしい」と言う依頼だったんですね。僕は、「はっ」と思って、すぐにそのことを学校長に話しました。当時の学校長は理解のある校長先生で、「わかった」と。「では、明日でもいいから、学校に来てもらってしのぶさんを知る機会をつくろうじゃないか」と。そのことを、職員朝会でみんなに諮ってほしいと言われたんですね。で、ぼくは職員朝会で、「先生たちに誰がしたかと言うのを探してもらうんじゃなくて、互いに理解し合う、しのぶさんを知る機会をつくってほしいという依頼が来たので、どうだろうか?」と話すと、皆さん賛成してくれて、翌日から3日間続けて来てもらいました。低学年、中学年、高学年。もちろんその3日間で彼女のことを全て知ることはできないのですが、当時、「共生の教育」と言うのが言われ始めていて、地域の中で障害を持たされたというか、水俣病患者であるそのしのぶさんと周りの子供たちが、ともに地域で生きていくうえで、何が大切なのか考えるいい機会だったと思います。それで、しのぶさんが僕に教えてくれたことは、「わたしはこの歩き方を恥ずかしいとは思っていない」と。

僕は、それまでの同和教育の中で、こんな言い方を子供たちにしていました。「きみたちはね、ちびとかデブとかいう言葉を絶対に使っちゃいかんよと。そういう言葉を言うと、言われた人は傷つくんだよ」と言っていた。ところがしのぶさんが言うには、「そんなことを言っているあなたの心の中に、小さいことや太っていることは恥ずかしいという前提があるじゃないか。傷つくから言っはいけないというその考え方には差別がある。私は歩き方が恥ずかしいとは思っていない。だから小さいことは恥ずかしいことではない。太っていることははずかしいことではない。そのことを馬鹿にすることが愚かなことでナンセンスなことだ。言われて傷つく必要はないよ。言う方が恥ずかしい。」と伝えていくことの方が本当の同和教育だと言うことをしのぶさんは僕に教えてくれました。しのぶさんのこの言葉を、授業するときに子供に投げかけています。

小さいとか太っているということで傷ついたり、それを気にしている子供はクラスに必ずいます。決してそれを負い目に感じたり、ダメなんだと感じる必要はないと。自分は自分らしくしっかりと、胸を張って生きることが大事だということをしのぶさんから学んだと思います。

最後に、田中家のお話をしたいと思います。

「きずな」のなかに、「この子とともに」というタイトルで田中家の戦いがかかれています。田中家は、田中実子さん、静子さんという公式確認のきっかけになった患者さんがいる家族です。1956年5月1日に水俣の保健所に水俣チツの附属病院の細川一医院長と小児科の野田医師が坪谷と言う地域で、原因不明の中樞神経の疾患をもった患者さんが多発しているということを公の保健所に報告したのが公式確認の日とされています。しかし、田中家の人たちが公式確認のきっかけとなっただけであって、患者さんの被害は今年で90年と言われている方が、支援されている方、研究者の方にはいます。1932年にチツの百間排水口から水銀垂れ流しは始まります。1932年から今年90年経ちます。水銀が海に垂れ流され始めて、小さな微生物は何かしらの影響を受けているわけですから。ぼくらは、公式確認のきっかけ、1956年5月1日と言うのももちろん大事にしながらも、この日、急に水俣病は発生したのではないという確認を常に持っています。

田中さんの長女、下田綾子さんは、残念ながらいま施設で療養されています。娘さんを担任することがあり、5年生6年生と2年間受け持ち、2年目の6年の時に、「先生、祭だけうちで飲みにおいで」と誘ってもらいました。喜んで、下田さんの実家、田中家にいきました。そして、お酒を飲んでいたら、「よかったら実子に会ってくれんな」と言われ、公式確認2号患者である実子さんが奥座敷で寝たっきりの状態で初めてお会いしました。「一緒にそこまで言って、よかったら手ばさすってくれんな」と言われて、初めてお会いして手を握らせてもらいました。「この子は、3日間ずっと起きとったかと思うと3日間寝続ける。」と。私たちは、一日のうちに半分寝て、半分起きます。でも、患者である田中実子さんは3日間ずっと起きっぱなしのことがある。だから、「自分たちは、心配で心配で熟睡したことはない」とおっしゃっていました。そしてその綾子さんが、お酒を飲んでいる居間に戻ってから一番心に残っている話が、「わたしは、学校とか先生とかいう言葉を聞くだけで、鳥肌が立つくらい、嫌悪感が走っていた。」と言われた。僕らのサークルの先輩である「鶴山先生に会うまでは、学校って大っ嫌いだったし、先生と聞くだけで嫌悪感が走った。」と。なぜかという、当時、綾子さんには、長男のお兄さんがいて、次男が下にいて、次女がいて、三女が静子さんと言う公式確認1号患者。四女が実子さんと言う二号患者。長男と自分と次男と次女は発症していなかったのが学校に通っていたわけです。

この4人にご飯を食べさせて、炊事洗濯を済ませて学校に行っていたため毎日遅刻をしていたそうなんです。その家庭の事情を当時の先生は、まったくくみ取ってくれず、「綾子また

お前は遅刻か!?!と廊下に立たされたり、ひどいときはグラウンドを走らされたりした。それがつらくて、つらくて…。何度死のうと思ったか分からない。でも、自分が死んだら誰が面倒を見るんですか?」と話してくださいました。その時、僕自身はですね、目の前に30数人担任していたんですけれども、一人一人の家庭の事情をどれくらいわかっているのかなと。もちろん、プライバシーを踏みこんで暴いていくつもりはないけれども、一人一人がいろんな思いをもって暮らし、いろんな悩みもあるはず。僕はそれをどれくらい知ろうと努力していたか?と思い知らされた。そのとき綾子さんが、おっしゃったのが、「先生、よか先生にならんばな」とおっしゃられて、「よか先生と言うのはな、勉強の教え方の上手か先生じゃなかよ。そら、上手かに越したことはないけれども、一人一人の気持ちの分かる先生になれ。」とおっしゃったんですね。僕自身は子供が持ってきたプリントを「なんでこんなにくしゃくしゃにして持ってくるんだ?」とか「大事な学習のプリントをぴしゃっときれいにして出さなければいけないよ」と言っている教員だったんですね。でもよくよく考えたら、ちゃぶ台でしか勉強できない子供もいたり、小さな弟や妹たちが、勉強していたら「兄ちゃん姉ちゃん、何しとつと?」と言って、寄ってきて落書きを横からしたり、くしゃくしゃにされる家庭の子供もいる。そういった子供たちを本当に分かるようになれと教えてくださったと思うんです。

そして、シールを張って競わせるようなことを一切やめました。そして、プリントをぐしゃぐしゃにして出していた子には事情を聴くとか。そんなことも下田さんに教えてもらったと言うことを子供にも話をしながら、いま、自分は、みんなのことを知りたいけれどもみんなも自分のことを伝えてほしいんだということを話します。いろんな授業をしますが、やはり基本は信頼関係だと思っています。そこをきちんと知らないといけないということを教えてもらったことが下田さんと思っています。

最後に、水俣を通して何を学んだかと言うことです。僕は最初、患者さんのためにやってるとか、社会のためにやってるとか偉そうに思っていたんですが、最終的に自分自身のためになったかなと思っています。さっき言ったように自分の故郷を語れなかった自分が、今こうやってえらそうにというか、みなさんに水俣の話ができる。僕は水俣で育ったからこそ、いろんなことを学ぶ考えるきっかけができて、自分を育ててもらったというふうに思っています。患者さんたちは、「先生たちをお願いしたいことは、真実をありのままに教えてほし

い。公害を教えるのではなく、公害を出さない教育をしてほしい。」とおっしゃいます。それから、「水俣から逃げるのではなく、水俣を誇りうる教育をしてほしい。」と。まさに公害を教えるということは、単なる知識を教えることではなくて、公害を出さないことを「水俣病を通して学ぶ」という「人の痛みの分かる教育」ではないかと思っています。

「水俣を誇りうる」というのは、何かと比べて自慢するという教育ではなくて、自分を育ててくれたオンリーワンとしての故郷。その故郷としっかり向き合って、それから自分としっかり向き合って、これからどう生きていきたいかをしっかり自分に持つことじゃないかと思います。

水俣だったからこそ、いろんなことを教えてくれて、見つけることができたと思います。

参加者の皆さんの故郷は、それぞれ違うと思いますが、「故郷が大好きですか？」と言う問いかけ。そして、水俣病問題は、何を教えてくれるか、それぞれ違うと思いますが、それを通していわゆる「切り口」と言う簡単な言い方になってしまいますが、これからも子供とともにいろんな「切り口」一緒に考えていけたらいいんじゃないかなと思っています。

◎「公害を教える」とは、単なる知識だけを教えることであり、「公害を出さない教育」とは、人の痛みの分かる心を育てる教育のことだと思えるようになりました。

◎「水俣を誇りうる教育」というのは、ふるさとや自分をしっかりみつめ、それらとしっかり向き合いながら生きていく生き方を学ぶ人権教育そのものを指していると思います。

◎ふるさとが「水俣」だからこそ、自分に教えてくれることがあり、それを見つけることが大切だと考えるようになり、水俣が好きになりました。

<後半部>

質疑応答

質問①

坂本しのおさんと袋小学校3日間の交流後、子供たちの変化はいかがでしたか？サークル活動を続け、授業するなかで、子供たちも変化するであろうし、こんな授業の中で先生方にも変化があったと想像します。そのあたりの相互交流を通して、子供たちの変化を教えてくださいたいです。

梅田先生からの答え

まず、しのぶさんのいわゆる歩き真似事件、については、誰が歩き真似をしたかは、最後の最後まで確認や調べませんでした。ただ、先ほど言ったように、3日間来られるなかで、最初は、しのぶさんを遠巻きにして怖がっていました。自分がこれまで出会ってきた大人と見た目もちょっと違うし、話し方や動作について、警戒をするような様子が見られた。しかし、一緒に活動や交流をするなかで、帰るときには「また来てください」と、にこにこ手を振る姿があったんです。だから、あえて誰が真似して、心の変化があったかを調べてないのです。その場に一緒にいて、同じ空気を吸いながら、いろいろなやり取りをするなかで、ぼくらと私たちと本当に同じ心をもった同じ人間だという確認というのができたのかなと。確かに見た目は障害をもたれて、自分らと違うという感じはあっても、中身的には全く同じで、本当にいろいろな悩みや苦しみや好きなことや嫌いなことやいろいろなものをもっていて、そういう質問をしました。「好きなのは何ですか」と聞いたら、「これです」とか言われて、「おー、ぼくと一緒だ」とか。「好きな色はなんですか」みたいな感じで、親しみというか近づいたんじゃないかなと思うんです。先生方については、事前に生徒にどういったことを話してたらいいですか、とか質問が多いのです。どういうことをしたらいけないんですかなどといういわゆる「ねばならぬ」とか、「してはいけない」ことは何かをやたら聞きたがるんです。あまりに失礼のないようにとか、そんなのを事前に言い過ぎていると、子供はリアクション的になんというか、怖いくせに怖くないふりをする。ぼくは患者さんと呼ぶときには相手の方に、「こわがるかもしれない、子供たちは、ストレートなので」とお知らせします。でもそれは最初の感覚を素直に出しているためであり、最後の最後までずっとこわがっているのなら、これはまた問題で、僕らの出会わせ方が充分ではないということです。少々失礼も実際にありました。初めのうちは、「こわい」と言って走って逃げた子もいたんです。だけど、帰りはまっさきにその子が手をにぎって、「また来てくださいね」と言っている。そういうふうな、同じ空間にいて、同じ空気を吸いながら、いろいろなやり取りをする機会、いわゆる当事者の生の声を聞くこと。それは僕が、100回「こういうことがあった」と言うより子供の心の奥底に響いていくし、先生がたも、前もって「これしたらいけない」というふうにしないほうが良いと思っています。前もって「この人は・・・」と話すと、本音ではない対応をする。そのリアクションをとったことを責めるのではなく、そこに変化が生

じて、子どもたちが、「また来てください！」って言えるようにしていくため、自分たち教員が、どういう出会い方をしたらいいのかを考えていけばいいというのを学んでもらえたかなという気がします。

質問②

サークル活動を通して、サークルや周りの先生がたの変化があると思います。ぜひ教えてください。

梅田先生からの答え

サークルメンバーはたくさんいないので、各校に1人ずついるわけではない。サークルの先生がいる学校は、いま言ったような、物の考え方や、患者さんと出会う機会を努めて作りながら、当事者の声を聞くので、本当の理解につながっています。今でいう「差別」は真実をしっかりと知っているが減っていく。「事実を知る」本人の想いを本人の声として聞き取ることの大切さというのはサークルのメンバーがいる学校や、サークルの先生を呼んだ学校には伝わったと思う。しかし、温度差は正直なところある。学校が20校あれば、できる場所もあれば、管理職によっては、「なぜ患者さんの側に立つのか」という雰囲気もある。チツソ城下町と言われる水俣では、チツソに歯向かっているという偏見をもたれる。ぼくらは、決してチツソに対して歯向かっているのではない。今日は杉本栄子さんのお話をできなかったのですが、栄子さんはずっと「チツソにはがんばってもらわないといけない」と言い続けてこられた患者さん。途中は、恨みつらみもあったのですが、「私は敵と言われる人と話ができる。そして次の一步を見つけていくことが、本当の解決につながる。」と、しきりに言っておられた。そういう意味で、さっき言った温度差をもっと埋めていきたかったが、できなかった反省はあります。

司会進行竹中

ありがとうございます。きっとそうやっていろんな交流を重ねてきたことやサークルを中心に水俣の学習をしてきたことの1つの形が、参加者の小島先生がチャットに書かれている「私は水俣出身と不安なく話すことができている。それは小学校のころから水俣病の学習をしっかりさせてもらったからだと思っています。」と1つの実を結んだ形、花開いた形なのかなと思いながら、お話を聞いていました。

質問③

患者さんにとってのサークルの存在とは？500回を超えたサークル活動はものすごいものだと思います。患者さんから見たらどうなのでしょう？

梅田先生からの答え

いろんな患者さんたちと関わらせていただいている中でのお話です。上村好男さん(智子さん父)は、ご出身が鹿児島県の伊佐市(旧大口)羽月です。羽月小の先生に呼んでいただき、そこで授業をしました。そのとき、お父さんがおっしゃったのが、「サークルの先生たちがこうやってこだわって自分たちのことをいろんなところに引っ張り出すというか発信してもらっているから、自分ら伝えきれなかった無念さというか、わかってもらえなかった無念さをいくらかサークルの先生たちにいろんな人に思いを知ってもらう機会ができて、ありがたく思っている。」と言われ、本当にぼくはうれしかったんです。僕らがやっていることを余計なことだと思っておられる方も、もしかしたら患者さんの中には、おられるかもしれないですが、そのことは直接耳には入ってこない。なかなかそれは言いづらいことだろうから。ただ、「先生たちががんばってな」といろんな団体の方に言っていただけています。

田中家に呼ばれた話を先ほどしましたね。当時、僕は砂田明さんという乙女塚の塚守をされていた方とサークルを通じておつき合いしていたんです。

「先生は砂田と付き合いよるみたいだけど付きあわんがよかぞ」みたいなことを言われた。でもそれはその方を悪く言うつもりではなく、被害者が一枚岩になれなくて、分断されているから出た言葉なのです。差別の構造の中での話なのです。本当ならば手をむすばないといけないのに、運動のやり方やいろんなことで分断されていく。そういった犠牲者だなあと思います。

その時に、若かった僕は、「いや、田中さん。僕は付き合いますよ」と思い切って言えなかった。今だったら、「付き合っつないでいくことが大事だとおもいます」ってことを自信もって言える。その時は、「ああそうですか」としか曖昧にしか言えなかった。

でもサークルの会には、絶対同じ場にいるはずのない方たちが、80名同じ空間の中にいて、自己紹介を順番にしていられる。サークルの僕らの先輩たちが地道に足を運び、先ほどの青本に載ってる教材や資料も聞き取りなので、これに載せていいと言う了解がないと載せられないやつばかり。その了解をえるということは信頼関係からしかできないんです。そうして、けっして患者さんたちを利用しているんじゃない。患者さんたちの犠牲をほんと

に無駄にしたくないという想いが伝わっているのだと思います。患者さんたちが僕たちサークルに持つ感情はいろいろあると思うんです。僕たちは、頑張っていくしかないなど思っています。答えになってなくてすみません。

司会進行竹中

いえいえ、とんでもない。サークルの500回記念の時に私は偶然水俣にいて、あの500回記念の時に参加させてもらって。あの熱気とかたくさんの方が集ってる明るい前向きなパワーにもものすごく圧倒されました。あの時歌っていた『生命の道』は、サークルで歌いつがれ、サークルの想いが共有されているんだなと思いました。

質問④

サークルをどう続けていくのか?どう活動していくのか?固まってしまった大人に対して梅田先生のおっしゃっていることを伝えていくこと、理解してもらうことにどんな方法があるのか、どんなことを実践されてきたのか?伝えることの難しさ、一緒にやっていくことの壁の高さについてどう思われますか?

固まっている大人っていうのは、一緒にこういうことやっていきましょうと呼びかけ、こういう実践やっていきましょうって言ってもなかなか心が動かないというか。一緒に歩んでいけない。教員っていうのは自分のクラスに自分が一人だけ担任としているわけなので。広がっていかず、温度差にもなる。地道に続けていかなければいけない。広げていくしかないのでしょうか…。

梅田先生からの答え

大人になればなるほど、凝り固まった考えとか、自分を否定されたくないという思いがあったり、他者を認めたくないという思いがあったりします。例えば僕らと同世代は先ほど言ったように自分の故郷を語れなかったり。「あいつらが騒いだおかげで水俣のイメージが悪くなった」というすり替わった考えが起きます。本当は、水俣病さえ起こしてなければ患者さんたちも騒ぐはずがない。引き起こしたチツソの経営とか、そこに原因があるのに、騒いだおかげで水俣のイメージが悪くなるいわゆるすり替えですね。そういったことを「いやそうじゃない」と言ってもなかなか固まったというか、育ちの中で形成された人は難しいと思うんです。だからといって諦めているわけではなく、子供たちに授業の中で、やっていく。

子供たちが家に帰って、「今日はこういった勉強をしてきたよ」ということを言う。その時に大人の考え方を少し変えていけるような実践をしなくちゃいけないという思いがあります。もっと具体的に言うと、例えば、先ほどの杉本栄子さんが、「私は、チツソが頑張ってもらいたいと思っている。」と言われていた。目の前にチツソ関連の子供がいる時に、水俣病の学習をどう進めているんですかと聞かれたことがあるんです。

僕は、初めに言ったようにチツソに勤めていた親の息子です。栄子さんがおっしゃるには、「目の前にいる子供たちすべての子が水俣病問題を通して、顔を上げて前を向いて生きていけるような授業をください」と。もしも、お父さんやお母さん、じいちゃんばあちゃん、お姉さんお兄さんがチツソに勤めている子供がいたとしたら、その子たちに何と云えばいいかというと、チツソというのは、確かに、かつては水俣病を引き起こし、過ちを犯した原因企業。じゃあ、今もその垂れ流しをしてるかということ、そうではない。

そして、栄子さんが言うには、「普通の企業は、二つの責任をもって営んでいる。2つの責任の1つは、働く従業員が生活していくための利益を得ないといけない。」当然ですよ。会社が潰れたら、従業員は路頭に迷うわけです。「2つ目は、世の中の役に立つものを作っていないとダメ」社会貢献ですね。ものをつくる以上は。この2つの責任は、すべての企業が持っている。「でもね、チツソは、それに加えてあと2つの責任をもっている、4つの責任を持っている企業だよ。」ということで、話をしたらいいんじゃないかと栄子さんに僕は教わったんです。3つ目が、「患者保障をし続けていかなくちゃいけない」いわゆる、原因企業として、患者保障の責任を継続して、医療の保障をしなくてはならない。その分、利益を得ていかないといけない。4つ目は、「いわゆる世界に類を見ない公害病、水俣病を引き起こした原因企業として、環境や人に優しいものの作り方の最先端を示していかなくちゃいけない」と。過ち・失敗を活かしたやり方というのを示して、見せつけていく責任がある。ということは、通常の企業よりも、もっともっと大変な責任を背負っているわけだから、そこで働いているお父さん、お母さん、じいちゃん、ばあちゃんに、「頑張れ」っていうことを言ってほしい。それは、僕たち家族のためと、世の中のためと、患者さんのためと、世界中の人のために、背負って頑張ってもらいたいということと言えるような授業実践をください。ということ。を、栄子さんはおっしゃったんです。「患者が被害者」「チツソが加害者」というような、ただそれだけのカタチの恨みつらみだけを残すような授業実践をすると、肩身が狭くなる。しっかりみんなが前を向いていけるような授業を組み立てなければいけないと。

僕が教えた子供たちが、親になってから、構成詩といって、自分の思いを詩に書いて、そして歌を盛り込んで、構成詩『海』というのをやった時に、いろんな歌をいっぱいたくさん歌う機会をつくりました。「もう二度と」という黒坂正文(まさふみ)というミュージシャンが作った水俣の歌とか、『海』という子供たちがオリジナルで作った曲とか、先ほど、竹中さんがおっしゃった『生命の道』とか。これはサークルの仲間が作詞作曲した歌です。そういったことを子供たちに歌わせ、記憶にずっと残す。大人になっても残るだろうと信じていました。今日の参加者にサークルの濱口さんもいると思います。彼女が袋小にいたときに、発表会を体育館であった時、僕の教え子が保護者となって来ていて、一緒に歌う場面を見たんです。それを見た時に、「あーこの子たちの心の中に、親になってもその時学んだことが残ってるなあ」と、とても嬉しかった。何人かの教え子たちは、「先生、今でもあの歌忘れずに歌えるよ」っていうことを言ってくれる子がいます。そういう、歌えるってことは、その時に一生懸命になって学んだことや考えたことも一緒に残ってるのかと。手前みそかもしれませんがすいません、以上です。

司会進行竹中 ありがとうございます。なかなか一緒に動けない仲間にしても、例えば先入観に凝り固まってしまうがちな人にしても、本気で本物に出会いながら、しっかり相手とやり取りしながら取り組んでいくことの大切さ、すごく感じながら聞いていました。時間が11時26分になりました。とても名残りおいしいのですが、そろそろまとめに入らせていただきたいと思います。

いろんな話を聞いてまいりました。さまざまな患者団体が、おれんじ館に集まった。普段なら一緒に集まらない患者さんたちが集まったという話の所で、私は、教育の責任とともに可能性をすごく感じました。敵味方じゃなく考える。教えたり向き合ったりする話にも通じるのですが、学校というところは、子供たちに対して教育すること、それを通して、地域とかいろんな人たちをつなぐ役割があるんだなあということを再認識した次第です。で、三つの例で、智子さんの宝子話やしのおさんやあの田中さんの、あやこさんの話を聞いて、三人とも心にのこる言葉って全く違うんですね。「わが娘だからもじよかったい」「よか先生にならんばな」「わたしはこの歩き方を恥ずかしいと思っていけない」水俣について私自身も学ぶ中で、水俣病のことというよりは、水俣病と出会ってしまった人の生き方をものすごく学んでいるような気がします。なので、最初は水俣病を学びに水俣に行っていたのですが、水

俣を通して考えること、水俣を通していろいろな人の生き方について考えることにものすごく目が向いている今日このごろです。

梅田先生が水俣においでくださいということをおっしゃいましたが、本当にまた水俣に行って、一緒にいろいろなことを見て感じて考えたいなと思っています。時間になりましたので、ここで一旦終了いたします。梅田先生ありがとうございました。

梅田先生

はい、こちらこそありがとうございました。

コーディネーター森山

梅田先生、本当にありがとうございました。参加者のみなさまに連絡をしたいと思います。チャットに感想や、質問を書いていただきました。ほかの方もよかったら感想など一言でも結構ですので書いていただくと私たちの参考になりますので、よろしく願いいたします。それから、環不知火プランニングのホームページURLをチャットに送っておきますので、よかったらご覧になってください。学校の先生の現地研修や、今回のようなオンライン研修会も実施しております。ぜひ参考にさせていただき、次の機会はよかったら水俣まで来ていただいて、先生に会っていただいたり、その場所を訪れたり、ということをしていただければと思います。今日は、裏方でやって下さる方たちがいっぱいいらっしゃいます。神戸からオンラインパイロットをしてくださっている増山さん、武藤さんどうもありがとうございます。そしてPeatixの応募設定をしてくださった吉田さんありがとうございます。今回のオンラインを全体的に引っ張っていただいた竹中さんありがとうございました。

12時まであと30分あります。12時になったらきっかり終わらせていただきますが、放課後タイムにいたします。11時30分現在で終了をさせていただいて、あとは自由参加です。時間が許す方はどうぞそのまま参加ください。参加者の皆さん、今日はどうもありがとうございました。いったん会をしめさせていただきます。用事があるかたは遠慮なく、退出というところをクリックしていただいて結構です。右下のほうにありますのでよろしくお願いします。では、ひきつづき竹中さん、進行をお願いします。

司会進行竹中

はい、ありがとうございます。放課後タイムです。30分限定です。本当に、雑談めいたもの

も含めて、感想とか述べていただき、交流できたらいいなあと思います。もしもお話されたいことがありましたら、チャットの方でも構いませんし、その方だけミュートとビデオ解除して、ビデオ映りたくない方がいらっしゃったら、OFFのままでOKです。まず、梅田先生、さっきお話しそびれたけれども、これ伝えたいなとか、お話ししながらこんなことも思い出したとかもしもありましたらよろしくお願いします。

梅田先生

チャットを見たら、「水俣病」という名前についてで、改名を求める声もいまだにあります。梅田先生は「水俣病」という名前についてどうお考えですか、という質問があるので、それについて答えますね。

僕自身は、「水俣病」という名前を変えるべきではないと思っています。竹中さんたちが「水俣に学ぶ」というブックレットを作られて、見させていただくと、それぞれの立場があって、変えた方がいいっていう方もおられるのは重々わかっています。チッソの正門の近くには、「病名を変えろ」という看板が立っています。でも、僕自身は、子供たちに感覚を押し付けようとは思わないし、君たちもこう思わないといけないよというつもりはなくて、ただ、変えない方がいいと思っているわけを話します。「水銀病」とか、違った名前になったところで、ほんとに患者さんたちの苦しみやその差別が消えるのかというと、全く消えないからです。「水銀病」の患者としてずっと見られていく。僕は、水俣で生まれたからこそ、水俣出身だということがいろんなところに行くと、もちろん「出身どこだ。」と言われて「水俣」というと、「あっ、あの水俣病の水俣か。」と返ってくる。そこで差別の苦しみを一緒に、背負った。「あの水俣病の水俣ですか。」と、患者さんをちっとも理解していないような感覚をもった人が、言ってきたならば、「患者さんたちは、好きでなったわけではないし、一生懸命に、自分の人生を切り拓こうとして、やっておられる方がいっぱいいる」ということを少しでも話して、偏見差別を減らしていく立場になりたい思いがあるからです。水俣に生まれて、自分と同じ世代のしのおさんたちがいる。たまたま生まれた場所が違っただけで、漁村に生まれれば、僕も水俣病患者だったろう。苦しみを10人で分けると軽くなるのかなっていう感覚です。変な理屈かもしれないけど。だから、「水俣病」という名前があって、どうのこうの言われたとき、きちんと返す。その偏見差別の思いで言っている人がいたとするならば、「そうじゃない」というのを伝える。そういう力をしっかり学校で付けて、送り出していけば、子どもたちもおれなんじゃないのかな、という思いがあります。

とはいえ、絶対変えたらだめだっていう考えを子供に押し付けようとは思わない。水俣出身であることは、水俣の学校にいる子供達は、間違いなく事実ですから、よそに行ったときに、「えー、あの水俣病の水俣に住んでいたの。」と言われる可能性はあるんです。その時にどう答えきるかっていうのが大事。隠していくというのは、絶対自分で苦しい思いをすると思うのです。びくびくするのではなくて、きちんとその時に、偏見差別の言葉に返せる力を付けたいと思うし、そのためには、逆に名前があって、軽くしていく。患者さんたちの苦しみを軽くしていく。軽くするためには、世の中の周りの偏見をもった人を変えていく。一人、二人、三人って変えていけたら、どんどん減っていくじゃないですか。理解が増えるようになりたいと思います。

司会進行竹中

水俣病が起こってから70年近い長い時間が経過したので、起こったころといまでは状況も違い、ますます考えは多岐にわたっていると思うので、安易な問題ではないような気がしています。先ほど、梅田先生から紹介してもらったのですが、神戸の小学校で水俣学習実践の冊子を作ったのです。水俣以外の町でされている水俣の授業と水俣で行われている授業とはどう違いますか？

梅田先生

難しいですね。サークルでは人権の問題として、視点をぎゅっと絞り込んだような感じで、生き方考えから見ようとしています。これからは、環境問題と言う視点からも整理しないといけないと思ったところです。水俣を発信しましょうという時に、水俣では資源ごみ22分別があるのですが、僕らは分別数がどんどん増えていくことが自慢ではなく、本当は世の中がそんなに細かく分けなければならない化学物質だったり、色つきガラス瓶だったりではなく、分けるのが少ない方が自然に返せるのです。だから、原始時代に戻れというわけではないが、いろんな容器をまた回収していく行為自体が、ある意味企業がやっている循環に巻き込まれていることに気付いていかなければならない。世の中本当にこれ必要なのか？これに代わるものはないのか？と言う視点でやっていかないといけない。水俣の取組を発信していくのは、単にすごいことをやっていますではなく、ここに行きつくまでの苦しみがあったからこそ、こんなことをやっているんですと言うセットではないかと思います。ごみをきちんと考える機会、環境問題をみんなで考える機会かなと思います。

司会進行竹中

捨て方を考えるというのは入ってくるものを考えることになりますね。

梅田先生

当事者当事者と簡単に言うんじゃなくて、患者さんだけが当事者じゃなくて、全員が当事者ですね。そういった意識は、ごみ一つにもつながっている。水俣の教訓と言うのも簡単に使うべきではないと思っていて、何をもって教訓とすべきなのかを整理し直さないといけないとも思っています。16頁に書いてあった、かきくけこからたちつてとはとても大切ですが、かきくけこ(悲しい厳しい苦しい険しい怖い)と言った状況もしっかりと理解したうえでたちつてとをやらないと、下手に、前向きな水俣を言いすぎるのもいけないと思います。

司会進行竹中

ほんとにそうですよね。そうではないときれいごとになってしまう。

吉田さん、感想または質問をお願いします。

参加者吉田

涙が止まらなくて聞いていました。私が授業をするとき悩むのが、裁判のことなんです。事情が複雑で最後に何を考えさせたらいいのかと思って授業をしています。梅田先生はどうしていますか。

梅田先生

裁判はとてもデリケートだから取り上げにくい。患者さんたちは少なくとも、第一次訴訟を始めたころ、どんどん分断されていく。ここで一任しないと誰も認めてくれないと言った自分らが受けてきた仕打ちや立場に追い込まれたことについて、自分たちに非はない。だから相手にきちんと非を認めて謝ってほしい、保証してほしいという気持ちから裁判に出ている。しかし、そうじゃない人もいます。

だからこうしなくちゃいけないということをお子に言うつもりじゃない。「この子とともに」の資料の中に「Vサインなき勝訴」という項目があります。裁判で勝ったからと言って、命が戻ってくるわけじゃない。相手に、悪かったとか、自分たちに非があったということ認めてもらえても、身内が戻ってくるわけでもなく、そういった複雑な悲しみ。本当は裁判が

起こらない世の中がベストなのです。それでもどうしても自分が納得できないような理不尽なことがあった時には泣き寝入りをせずに訴えていく。

第一次訴訟のしのぶさんたち、上村さんたちはそこをずっと貫いてこられた。

なぜ今でも裁判をされているのかは、そういった方たちに話を聞きながら、やはり自分が納得できないことはそのままにはしておけないのが、当事者の事実と思います。子供たちには「こういうことがあったから、裁判されているらしいよ」ということしか伝えられない自分がいます。裁判をしない方たちの想いを聞きとれていないので、吉田さんが言われたように、難しいなとおもいながら、どこか逃げているのかなと言う気がします。そして、少なくとも裁判があったこと自体が異常。異常というか、どっかにゆがみがあるから訴える人がいます。自分勝手な理由じゃないはずです。だから、どうしてそういう風にされていくのか考えてみようよと言うことで、投げかけとかには使います。そういう程度です。ごめんなさい。

司会進行竹中

授業する中で難しいと思うところはあるのですが、裁判もその一つですね。避けて通れるものでもないし、でもここから何を考えさせるかは難しいところだと思います。

梅田先生として、これは譲れないということをお聞きしたいと思います。

梅田先生

難しいですね。いろんなことを、自分らしくありたいとか、自分自身が、感じたことをごまかし、曲げて伝えるのではなく、感じたまま、子供たちに押し付けずに、こんなことがあったよと言うのをありのままに伝えたい、そして、教師である前に、人として向き合いたいというのが一番です。お話した下田さんが、いま病気入院されていますが、とてもお世話になっていた方です。先ほど話に出た濱口さんが、6年2組を持たれているとき、無二の会をつくられ、下田綾子さんたちはカラオケ大好きだったから、保護者の方たちとお酒を飲みに行くような会(グループ)ができたんですよ。うらやましいなと思っていました。もちろん、みんなじゃないんだけど、声をかけてもらって、一緒にいきましょうとなったときに、「先生」としてより「人」として、子供や保護者とどう向き合っていけるかは大事にしたいなとずっと思っています。肩書は先生だけど、その前に人間としてどうかというところですね。以上です。

司会進行竹中

本当に貴重なお話をありがとうございました。放課後タイムも終わりますが、人数が少なくなってきたので、よろしければ、最後にミュートを外して、全員お顔を見せていただけたらと思います。みなさんありがとうございました。

(ビデオをオンにして手を振って終了)



中竹行憲会印

-
- 主 催 水俣から学ぶティチャーズネットワーク
 - 共 催 (社)環不知火プランニング
 - 助 成 熊本みらい基金
 - 協 力 神戸市小学校教員
- (司会進行:竹中美香子、オンラインパイロット:増山光、武藤太平、オンライン受付:吉田かよ子)
 コーディネーター (社)環不知火プランニング代表・森山亜矢子

中竹行憲会印

主 催 廣 瀨 武 先生

廣瀨 武先生

教育講演会

(金) 日 12 月 11 年 12021

協 賛 梅 田 卓 治 先生

主 催 廣 瀨 武 先生

講演内容は、水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

田 謝

講演内容は、水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

廣 瀨 武

講演内容は、水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

- 勉強会主催 熊本県職員組合 水俣芦北支部教文部
- 場 所 水俣市もやい館 和室A室
- 記 録 森山亜矢子（水俣から学ぶティーチャーズネットワーク）
- 協 力 梅田卓治（水俣芦北公害研究サークル会長）

広瀬 武 先生

教育講演会

2021年11月12日(金)

講師:広瀬武先生 進行:梅田卓治さん

内容:ご自分の歴史を語ることを通じて、水俣芦北地域で当初タブーとされていた水俣病学習の黎明期の時代背景を語っていただいた。

・梅田

資料に沿ってお話をお聞きできたらと思っています。僕がいっぱいしゃべると時間が短くなります。先生、早速、資料に沿ってよろしく願います。

・広瀬

こんばんは。ちょっと腰が悪いものですから、椅子に座って失礼します。10月15日で87歳になりました。私は水俣市平町で1934年、昭和9年10月15日生まれました。

浜口尚子先生のお父さんは確か、相年だったと思います。県同教の会長を長く務めた宮崎新二郎さん、彼は熊大のときの同級生で、亡くなって1年4ヶ月になります。宮崎さんの奥様から電話がありまして、今度、宮崎さんを偲ぶ会の資料を作ると言うことで発起人が何人かおられて、ぜひ私にも原稿をお願いしたいということで、引き受けました。

あとで宮崎さんのことはまた、話の中に出したいと思います。

私が、当時の国民学校1年生(現在の小学1年生)の時に太平洋戦争が始まりました。12月8日、霜がいっぱいおり、靴下を履いていない靴を履き、震えながら、校長先生の話をお聞きしました。その時に「日本はアメリカを相手に戦争をすることになりました。みなさんも早く大きくなって、お国のために頑張ってください。」と言われた。その時はまあ小学1年生ですから、何も考えず聞いていたわけです。いま考えますと、校長さんの話はおかしいわけです。「早く大きくなって、お国のために尽くしてください。」と言うが、早く大きくなれるわけがありませんね。

3年生になると、現在の第一小学校に通うようになりました。それまで1年生と2年生は現

の第二小学校。第一小学校が本校で第二小学校が分校のような形でした。

1年生2年生のときは、姓が田中でした。3年生の時から広瀬になったのです。

これは大阪に母の弟がおりまして、大田といいます、その叔父の後見を受けて広瀬家に養子に入った。広瀬春子っていうのが養母でしたが、亡くなったものですから、私は家名を継ぐために広瀬に養子縁組したので3年生から広瀬に変わりました。

3年生の時に、退避訓練が始まりました。この当時はまだ防空壕が出来ていませんでしたので、一小(水俣市立水俣第一小学校)の裏の山に登って、そこに避難をしていた。退避訓練が昭和18年から始まりました。水俣の空襲は昭和20年が一番ひどかった。

チッソの工場があったので、空襲の目標になったわけです。昭和20年は空襲の連続で、学校に行ってもすぐ退避していました。それで各地区に分かれて分散教育をやっていましたね。私は平(ひら)にいましたので、西念寺で分散教育を受けました。

そのときに御堂で、いま目の前にあるような長机があつて、勉強していました。ある日、自習の時に誰かが、すかしっぺ(おなら)をしたのです。それが臭いのなんのって。考えてみますとね、からいも(さつまいも)を食っているから、くさい屁を出した。「くさい、くさい」と言って騒いだわけです。そしたら、山下と言う男の先生が、理由も聞かずにね、男の子どもをみんな並べて、ピンタを張ったわけですよ。

私はいたずら好きな子どもでした。そのとき、「あんただろ?」と言った。そしたらむきになって、「いや、俺じゃない」と。揉めている間に先生から、「出ておいで」と言われて、私はその山下先生の前に呼ばれ、お寺の半鐘。桜の木で作ってある半鐘叩きで、頭をポカポカ殴られました。

5年生の時は、援農作業と言って、現在の水俣高校の南福寺にあるグラウンドですね。あそこはずっと田んぼだったのですよ。そこに、麦刈りのお手伝いにやらされて、みんな並ばせられて、先生の話をしている時に飛行機が飛びました。私が、「あー、飛ぶよ、飛ぶよ」と言いました。今度は、「話を聞かんやつは誰だ!」と先生が言うので、「僕です」と手をあげたら、今度は、麦刈の鎌の柄で、頭を殴られた。その時、いくつ殴られるのか数えました。涙を流しながら。48回殴られました。頭が凸凹になりましたね。「こういう先生には、絶対なりたくない!」と思いました。

新制中学になりました。教育制度が新しく変わったのです。小学校が6年生まで、中学校が3年生までということはいわゆる63制度が始まる。私は水俣新制中学第1回生。校舎は第一小学校に借りて、1年生の時は、そこで授業を受けた。そしたらなんと皮肉なことに私

水俣病公害被害者支援センター

水俣病公害研究サークル 4代目代表

梅田 卓治先生

オンライン研修会

(土) 日 25 月 6 年 2022

研修会の概要：テーマは「水俣病の被害者支援」で、内容は「水俣病の被害者支援の現状と課題」について、梅田先生から講演があり、質疑応答の時間もある。内容は、水俣病の被害者支援の現状と課題、水俣病の被害者支援の重要性などについて、梅田先生から講演があり、質疑応答の時間もある。

現地水俣での水俣病学習について、地域内でどのような授業を
実践されていたのか話していただいた。

患者さん、生徒との交流を通じて、教師もともに育ててもらったという
今も含む貴重なお話し。

研修会の概要：テーマは「水俣病の被害者支援」で、内容は「水俣病の被害者支援の現状と課題」について、梅田先生から講演があり、質疑応答の時間もある。内容は、水俣病の被害者支援の現状と課題、水俣病の被害者支援の重要性などについて、梅田先生から講演があり、質疑応答の時間もある。

- 主催 水俣から学ぶティーチャーズネットワーク
- 共催 (社) 環不知火プランニング
- 助成 熊本みらい基金
- 協力 神戸市小学校教員 (司会進行：竹中美香子、オンラインパイロット：増山光、武藤太平、オンライン受付：吉田かよ子)
- コーディネーター (社) 環不知火プランニング代表・森山亜矢子

梅田 卓治 先生

オンライン研修会

2022年6月25日(土)

テーマ：『現地水俣での水俣病学習』

内容： 現地水俣での水俣病学習について、地域内でどのような授業を実践されていたのか話していただいた。患者さん、生徒との交流を通じて、教師もともに育ててもらったという今も含む貴重なお話し。

<前半部>

梅田先生講話

こんにちは。紹介いただいた水俣芦北公害研究サークル4代目代表の梅田卓治と言います。僕は一旦学校を退職し、再任用で小さな山間部の小学校に勤めています。再任用5年目になり、特別支援の担任をしています。今日は、こういう機会を作っていただきましたので、一時間半有意義な時間になればと思っております。どうぞよろしくお願いします。

自己紹介を簡単にしたいと思います。いつもついつい喋りすぎて、肝心なところで時間が足りなくなりますので、ここでは簡単にお話しします。チッソ社員の長男として、1958年2月11日に水俣で生まれ育ちました。祖父は北朝鮮の興南工場に勤め、父は一緒に行っていたので、終戦とともに命からがら帰ってきた経歴を持ちます。祖父も父もチッソ社員でしたので、小さい頃から僕に入ってきた情報というのがチッソ側の情報ばかりでした。今日は、授業の実践を中心にお話してくれと言うことですので、「豚肉事件」「中体連事件」など、僕自身が小中学生のとき経験した話もしたかったですけれど、時間も限られているので、よければ水俣においでになった時、この話はじっくりできるかなと思います。よかったら水俣に長期休業など利用しておいでになってください。

「出身地事件」のことだけお話をしたいと思います。僕が大学をどこに行こうか迷っていた時代は、一期校、二期校最後の年で、二段階受験ができました。そして、二期校をどうする

か迷った時に母の弟が神奈川県にいたので当時二期校だった横浜国立に行くことになりました。北は北海道から南は九州から来ている仲間がいました。そこで最初は、「お前出身どこだ？」という話になるわけです。その時に僕自身は、自分の出身をストレートに「水俣」と言えませんでした。「九州だ」という言い方をするのは。少し付き合いが長く、深くなってくると「九州のどこだ？」ってなるわけです。それでも「熊本」と言って、「水俣」の名前を言えない。「あの火の国熊本の出身か」と言われる。見た目がこういう格好ですので、なるほど暑苦しい感じの熊本出身で納得してもらって終わる。だけど、もっと付き合いが深くなると「熊本のどこだ？」と言う話になるわけです。その時に、「実はあの水俣だ」と言うとほとんどの友達が、「あの水俣病の水俣か」と答えます。そして、必ずその後質問がついてくる。「お前は水俣出身なのになぜそんなピンピンしてる？」と。元気な見た目をしていたのでいつも質問されていました。その時に答えていたことがとても情けなかった。「俺が食べていた魚は、ずっと沖合でとってきた魚だ。水俣病の方たちは、沿岸で魚を獲って多食した人たちだから、まったく俺とは関係ない。自分が食べていた魚は、水俣病の患者さん達が食べていた魚とは違って、だから俺はこんなにびんびんしているんだ。」と言う、とんでもない説明をしていました。

そんな説明を聞いて、ほとんどの人はそれで終わる。「ああ、なるほど」と言うように納得していました。それをいいことにそう言った説明を繰り返していたのです。

関西から来ていた友達が、お酒の勢いもあったのかもしれませんが、急に怒り出したのです。「梅田、お前は今までストレートに水俣って言えなかったろうが、お前は心の中に自分の故郷「水俣」に水俣病っていう病気があってそれを恥ずかしいと思っているだろう。水俣病患者がいることを嫌だという思いがあるからだろう。」と突っ込んできました。返す言葉がありませんでした。

その通りだったからです。でもそのときにその声をかけてくれた友達のおかげで、いかに僕自身が故郷水俣と向き合えていない、水俣病問題としっかり向き合ってこなかったというのを思い知らされました。

まあそういう僕自身の、「水俣病と出会いができてなかった」ところが、今の僕自身の、この公害サークルに入ってもっと知らなくちゃいけないというきっかけになったと思います。

学校に赴任したら水俣病のことを話すことになりました。初任の菊池郡の西合志南小学校では、今、皆さんにお話ししたような出身水俣を語れなかったという話を子供たちに話すことは、一度もありませんでした。この小学校は、人権同和教育を真剣に取り組んでおりま

申請日 年 月 日

使用申請書

⑤

広瀬武先生講演会のPDFデータ貸し出しを申請します。

学校名もしくは団体名 (ふりがな)

担当者名 (ふりがな)

メールアドレス

携帯番号

@

学校もしくは団体の住所

電話番号

〒

申請先 一般社団法人環不知火プログラミング内 水俣から学ぶティチャーズネットワーク

moriyama@minamatakumamoto.jp または FAX 050-3730-3585

※他校の先生に広瀬武先生講演会について紹介していただくのはありがたいのですが、使用される際には必ず当法人を通して使用申請をお願いします。ご協力をよろしくお願いします。

申請日 年 月 日

使用申請書

梅田卓治さん教育講演会のPDFデータ貸し出しを申請します。

⑥
学校名もしくは団体名 (ふりがな)

担当者名 (ふりがな)

メールアドレス

携帯番号

@

学校もしくは団体の住所

電話番号

〒

申請先 一般社団法人環不知火プラザソング内 水俣から学ぶティチャーズネットワーク

moriyama@minamatakumamoto.jp または FAX 050-3730-3585

※他校の先生にこのシートを紹介していただくのはありますが、使用される際には必ず当法人を通して使用申請をお願いします。ご協力をよろしくお願いします。

申込書・資料ダウンロード

申込書

- エコタウン申込書 [ダウンロード](#)
- 修学旅行 視察研修申込書 [ダウンロード](#)
- マイマイ運動申込書 [ダウンロード](#)
- 環プラ事業に関するヒアリング申込書 [ダウンロード](#)
- 環プラ機材貸出し申込書 [ダウンロード](#)
- 水俣病資料館見学および語り部講話申込書 [ダウンロード](#)
- 下見現地研修申込書 [ダウンロード](#)

申込要綱

- エコタウン見学要綱 [ダウンロード](#)
- マイマイ運動要綱 [ダウンロード](#)
- 水俣語り部および講話要綱 [ダウンロード](#)

- 上記 広瀬武先生講演会データ使用申請書 [ダウンロード](#)
- 梅田卓治先生オンライン講演会（2022.6.25）記録サンプル [ダウンロード](#)
- 上記 梅田卓治先生オンライン講演会データ使用申請書 [ダウンロード](#)
- 水俣フィールドワークの基礎学習 [ダウンロード](#)
- 水俣フィールドワークの基礎学習 英語版 [ダウンロード](#)
- 事前学習資料 一覧表 [ダウンロード](#)

水俣フィールドワーク資料

- 親水遊岸・慰霊セレモニー [ダウンロード](#)

パンフレット

- みなまた・あしきたパンフレット2022 [ダウンロード](#)
- minamata ashikita leaflet (ENGLISH) [ダウンロード](#)
- minamata ashikita leaflet (簡体語) [ダウンロード](#)
- minamata ashikita leaflet (台湾語) [ダウンロード](#)

料金

- 料金概要 [ダウンロード](#)
- 基礎料金表 [ダウンロード](#)

事前・事後 学習資料

- 水俣学修ワークシートNO.1・NO.2（小学生用）サンプル [ダウンロード](#)
※申請いただければ、サンプルにはありませんが、解答例・指導案も別途お送りします。
- 上記 小学生用水俣学修ワークシート使用申請書 [ダウンロード](#)
- 水俣学修ワークシートNO.1・NO.2（中学生用）サンプル [ダウンロード](#)
※申請いただければ、サンプルにはありませんが、解答例・指導案も別途お送りします。
- 上記 小学生用水俣学修ワークシート使用申請書 [ダウンロード](#)
- 広瀬先生教育講演会（2021.11.12）記録サンプル [ダウンロード](#)

2022.7.21(木)14~15:30

長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 山口響さんヒアリング

RECNA の設立趣旨

長崎大学は世界唯一の被ばく医科大学の歴史を継承する大学であり、「核なき世界の実現」は大学にとって重要な課題である。長崎大学核兵器廃絶研究センターは、被ばく地に存在し、被ばくを実体験したアカデミアの共同教育研究施設であり、次の目的をもつ活動拠点として設立される。

- ① ヒロシマ・ナガサキを現在の世界の潮流の中で新たに位置づけ、学問的調査・分析を通して核兵器廃絶に向けた情報や提言をさまざまな角度から世界に発信する。
- ② その過程や成果を活かして大学教育に貢献する。核兵器廃絶研究センターは、核兵器廃絶を願う一般市民のために地域に開かれたシンクタンクとして、長崎市や長崎県などとも連携を図りながら運営される。

特定准教授・客員研究員 山口 響さん

(YAMAGUCHI, Hibiki) Journal for Peace and Nuclear Disarmament (J-PAND、長崎大学発刊) 編集長補佐。1976年、長崎県生まれ。一橋大学大学院修了(社会学博士)。現在、長崎大学・長崎県立大学・活水高校で、非常勤講師として核や原爆の問題について教えながら被爆者の活動をライフワークとして支えている若き研究者。



長崎の教育現場における平和学習のための記録の現状について

1 教育者による被爆者ヒアリングについて

被爆者本人の記録は、学校教員がフォローすることによって記録されているケースがほとんど。学校の授業の中で、PTAも含めたヒアリングをしていた時代（1970年代）もある。授業のプロセスの中にヒアリングを入れ込んだ。

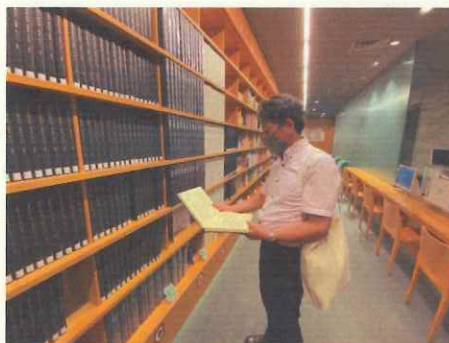
しかし、学校現場に限られ実施しているため、聞き取り対象者が限られてくるのは否めない。民間人で文書を書くことができる人は少ないため、教員のフォローは必須となるのが実情。

山口さんが関わっている「長崎の証言の会」は、1970年代までが最も聞き取りをしている。それ以降は、教師が高齢化しているためそう進んではない。

「何人の聞き取り記録が残っているのか？」という質問はよくあるが、重複している人もいるためきちんとした数は、カウントできていない。冊子は70冊を超えていて、ざっと1000人は記録されていると思う。

2 記録の保存状況

前述した「長崎の証言の会」や山川剛さんの「被曝教師の会」など会に保存されているもの。そして、教師各自が保存している生データがある。教師が引退し高齢化していて、自宅保存では廃棄の可能性があることが大きな課題。



国立長崎原爆死没者追悼平和記念館について

<趣旨>

原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律第41条の規定に基づき、国として、原子爆弾による多くの死没者の犠牲を銘記し、恒久の平和を祈念する施設として、被爆地の長崎市と広島市に設置。

<機能>

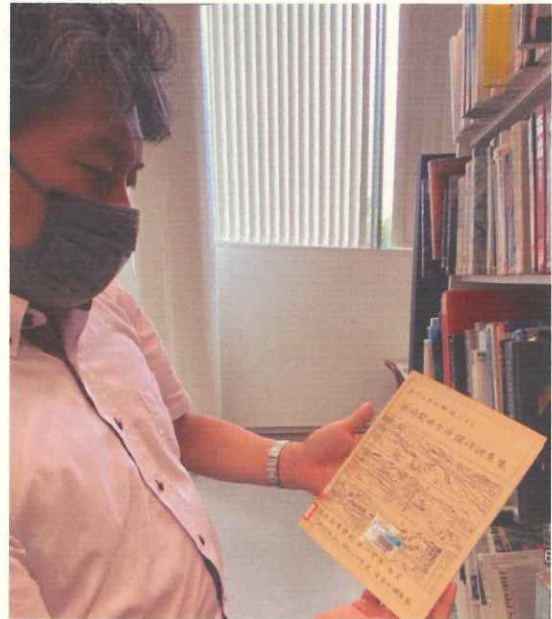
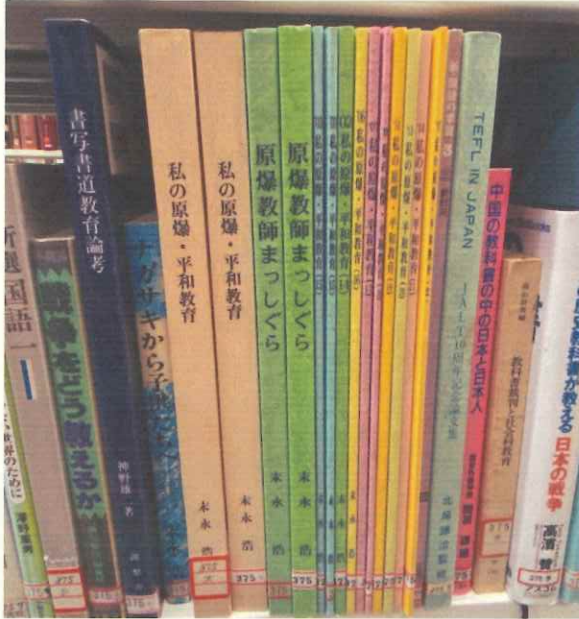
祈念館の主な機能として、「平和祈念・死没者追悼」、「被爆関連資料・情報の収集及び利用」、「被爆医療を中心とした国際協力及び交流」があり、「平和祈念・死没者追悼」は両祈念館共通の機能と位置付け、長崎は「国際協力及び交流」を、広島は「被爆関連資料・情報の収集及び利用」をそれ



それぞれの特徴とし、相互に協力、連携。

原爆資料館図書室について

原爆・平和に関する書籍およそ2万5千冊を所蔵しており、児童図書コーナーや被爆体験講話や過去に放映された原爆・平和に関する番組を視聴できるビデオコーナーがある。



3 記録の学校現場での活用

長崎市立小学校では、授業がプログラム化している。6月に原爆資料館を見学して、被爆者の話を聞く。夏休みになると「あじさいノート」が子供に配布されて、8月9日は登校日となる。爆心地そばの山里中学校と城山小学校は、濃くプログラム化されている。総合学習の中で、長崎市から与えられているプログラムを超え授業できているか？と言われるとほとんどないと思う。授業は、教育委員会の副読本で完結しているのではないか。

公立学校では、前述に似た授業である可能性が高い。私立学校では異なっていて、活水などは特殊なケース。「原爆投下したのはアメリカ」であることは、教育委員会資料の中では明示されていない。賠償請求権をサンフランシスコ講和条約によって放棄しているため。だから、公には、「投下された文脈」を飛ばす。「水俣病の民衆史」のようなものが、長崎には存在していない。これは「証言の質」ということになるが、「投下された証言」の一瞬で終わった話にパターン化されている。実際には朝鮮被爆者など存在しているにも関わらず。

いわゆる「黒本」が何百冊も国立長崎原爆死没者追悼平和記念館に存在するが、あまりにも多すぎるといふことと、この記録の存在を教師はほとんど知らないと思われ

る。また、認知度が低いことに加えて、個人情報が含まれているため「黒本」は平和記念館に訪れなければ、見ることはできないし、コピーすることもできない。

原爆資料館図書室については、貸出ができるし、貴重な資料も多いのだが、こちらも教師に存在が知られていないためほとんど活用されていない。

修学旅行については、旅行会社から原爆資料館や会に声がかかる。最近ではバスガイドに依頼して現地案内人が関与していないケースも増えている。どういう案内をしているのかは不明だが、良い案内をしている可能性もあるので、そこまで悪いこととは思っていない。今日は、夏休みに入ったので落ち着いているが、資料館内は一昨日までごった返していた。

4、記録についてその他

被爆者の声というウェブサイトがある。元NBCの伊藤明彦さん（東京）は長崎市に入って被曝した方で、原子爆弾被爆証言取材の第一人者。「被爆者の声を記録する会」の代表を務め500人以上の証言をテープ、CD、ネットなどに保存。各地の資料館や図書館に寄贈している。彼は、公開を前提とした聞き取りをしている。

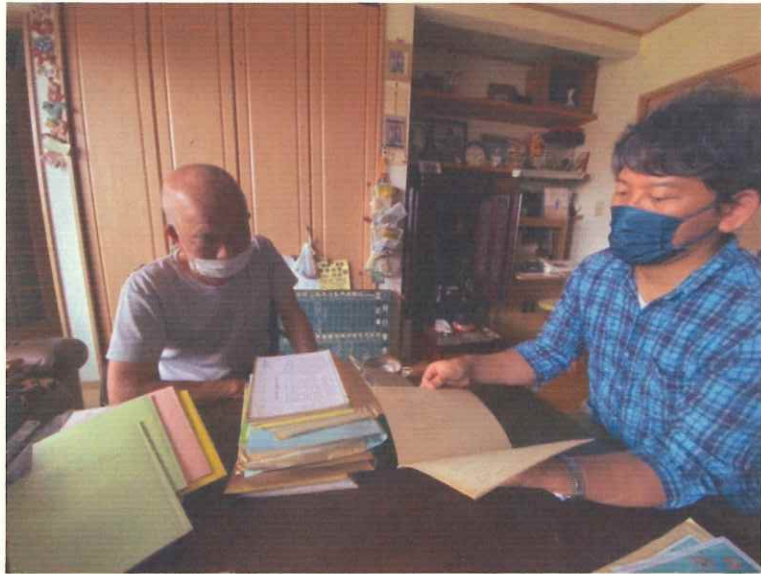


2022.7.23 (土) 10:00~11:00

末永浩先生ヒアリング 85歳

1936年(昭和11)、長崎市生まれ。戦争中は疎開し、入市被爆。新制中学校卒業後、郵政省の職員として働きながら、高校、短大、大学を卒業し、長崎県の中学校社会科教員として働き、平和教育に取り組む。長崎市立山町のご自宅でヒアリングさせていただいた。

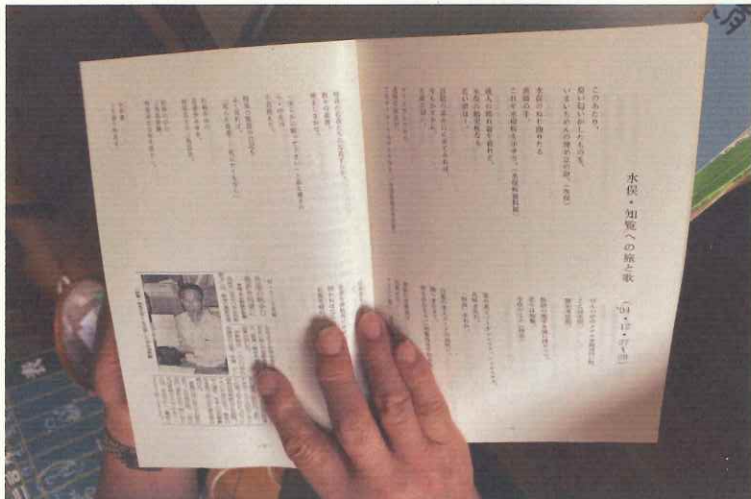
①被爆者聞き取りについて
聞き取りされて授業をしつかりされていた方は、長崎大学附属中学校(森山亜矢子卒業校)では浜崎ひとし先生(中学国語)という方がいたと思う(末永先生と同じ世代)。1974年ごろ遺跡めぐりに広瀬先生、露木先生など熱心な方達がいた。次の世代が、私や浜崎先生。初めは私たち被爆者も熱心ではなかったし計画的にスタートしたわけでもない。



②水俣との縁

水俣に行って、長崎に来たという学校もたまにある。また、1994年、水俣から呼ばれて、吉田勝二さんと講演をしに水俣に行ったことがある。どのような体験をどのように話されているのか知りたいということだった。そのときはディスカッションというより一方通行で話をしただけという記憶。

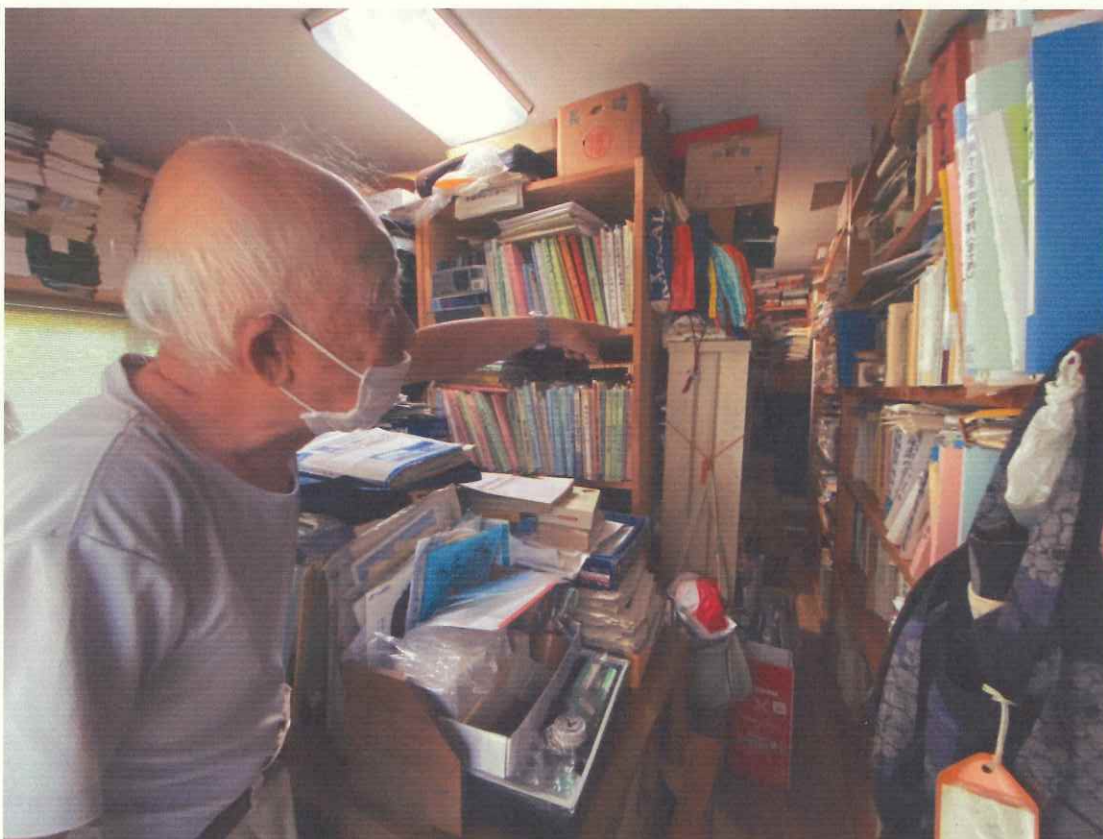
水俣市がまだ語り部の活動をしていないときに呼ばれたのかもしれない。このときに行った以来、水俣との交流はほとんどないと思う。水俣から来ている学校に案内をしたこともある。



③記録保存について

私がいなくなれば、娘はこの資料を捨ててしまうと思う。妻ならば捨てないと思う。山口さんたちと今後の資料の保存についていままで話したことはない。図書館にコーナー（末永浩さん寄贈コーナー）を作ってもらおうことかと思う。浜崎さんのはどうなったのかなあ。（10年前に亡くなられて、奥さんも崖の草取り中に転落して亡くなられた。広瀬先生の若草町の自宅に資料は残されている。しかし、資料の量がそれほどないことは確認している。山口さんより）。

一部屋まるまる資料庫になっている。教員当時は、親が被曝体験世代だったので聞き取りができた。生徒が書いたものは生徒に返した。山里中学校では学校に残してきたが、いま保存されているかどうかはわからない。山里にいるとき、広島市立翠町中学校と交流をした。



他の先生は、授業はしたと思うが、こんなに聞き取りや資料を残すことはしていないと思う。テープ（動画）がたくさんあるが、家内からは捨てろと言われている。

④現在の先生がたへ

授業の実践記録をとってほしい。実践記録をきちんと残すのは大切。研究指定校になると残ると思う。記録を残すと来年以降に活かすことができる。子どもたちに予習なども促せる。現代の学校の先生は、学校に学校要覧があってもなかなか残していないと思う。修学旅行の記録を学校が返信してくれるものは、全部残している。立教はとても熱心。返信

くれたものを読むのはエネルギーが必要だが、自分の話したことなどを反省するのに役に立つ。外海町や生月から原爆までレポートが至る学校もある。

⑤語りについて

被害、加害の両方について話す教員は少ないと思う。初めは、自分も話すべきだと思ったが、自信がなかったので、中国、東南アジア、ドイツなどにも旅行で行った。真珠湾についても話すこともある。私は福建省で日本語を教えたことがあり、歴史的な経緯と贖罪の気持ちがある。常にではないが、加害について一部分触れることもある。日本側の加害についても触れないと平等ではないと思う。語りの時にその話をする必要がある。

宋永浩様

先日は本校9年生の修学旅行に平和学習の講師としてご協力
をいただきましてありがとうございました。

「日本は先の大戦において加害者であり、被害者だ」とのお言葉があり
ました。これは現在の日本が周辺諸国との国交を断絶していくに
つながる課題として残る私たちに自身の問題です。明治生かだった
私の祖父は軍人として満州に出征していました。祖母は空襲の中痛
てになった私の父の姉の遺体を抱いて防空壕へ逃げたと泣きながら
話してくれました。生前の祖父は中国や朝鮮の人々をこ
とよくは思っていないと。どのような体験・経験・行為をしたのだろ
うと胸が痛くなります。でも祖父が生き残り、祖母が生きていた

⑥講話や案内受入数や料金について

料金はきちんと決まっているわけではない。

講話は1時間10000円(交通費含む)。

遺跡の案内については、2000円~5000円ぐらい。

コロナでここ数年は案内や講話回数は減っている(画像参照)

国際平和シンポジウム2

7/20 428人(7811)

年	人数	金額
2001	40 (918)	55
2002	40 (918)	61
2003	50 (958)	53 (9757374)
2004	93 (960)	
2005	13 (97813)	12 (" 329)
2006	36 (1019)	37 (428)
2007	29 (1029)	29 (418)
2008	36 (1055)	26 (888)
2009	39 (1128)	41 (525)
2010	41 (1165)	43 (568)
2011	45 (1210)	43 (601)
2012	38 (1243)	36 (639)
2013	43 (1286)	27 (664)
2014	48	28
2015	52 (1321)	22 (718)
2016	50 (1437)	8 (722)
2017	30 (1469)	15 (737)
2018	22 (1489)	14 (751)
2019	35 (1520)	24 (775)
2020	11 (1535)	12 (787)
2021	16 (1551)	18 (805)
2022年	6月~11月	7